

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

D. H. Lawrence : 小説研究(II)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 1979-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/633

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



D.H. Lawrence: 小説研究 (Ⅱ)

内 藤 歓 修

Ⅲ 暗闇の神を求めて

Women in Love で Birkin と Ursula との会話で提示された主題である男と男の関係や、男と女の関係は、この時期には新しい発展をみせ、Lawrence は一つの哲学的体系に近いものを作り上げた様に見える。そしてこれからは自らの哲学を説く予言者の態度をとる様になった。彼の所謂哲学は *Psychoanalysis and the Unconscious* (精神分析と無意識) と *Fantasia of the Unconscious* (無意識の幻想曲) にはっきりと説かれている。そして *Aaron's Rod*, *Kangaroo*, *The Plumed Serpent* などの一連の作品はそれを、具体的に小説の形にしたものであると言える。

Lawrence は 1919 年十一月十四日にイギリスを去り、妻 Frieda とパリで落ち合って、十九日にフィレンツェに着く。その後シシリー島タオルミーナ (Sicily, Taormina) に赴き、途中時々旅行はしたが断続的にここに、1922年二月二十日迄住む。それから、セイロン (Ceylon) に行き Brewster 一家と再会し約一ヶ月滞在。次に五月四日オーストラリアに渡り、ニュー・サウス・ウェルズ (New South Wales) のシルール (Thirroul) の「ワイワーク」(Wyewurk) 荘に三ヶ月程滞在する。こことても定住の地とはならず、今度はニュー・メキシコ (New Mexico) のタオス (Taos) へ。ここは Lawrence がかねてから、招待を受けていた Mabel Dodge Luhan 夫人の家のある所がある。彼女は Lawrence の *Sea and Sardinia* を読んで、彼にアメリカ・インディアンの生活を観察させてやりたいと思ったのであった。この様にして Lawrence 夫妻はニュー・メキシコやメキシコを旅行したり、滞在したりしながらこの地方に暮す。1923年末から24年初めの間ヨーロッパに旅し、又三月半ばにニュー・メキシコに戻り暫く滞在し、メキシコを旅行したりする。25年五月「肺結核」と医者に告げられた後、ニュー・ヨーク経由でロンドンに行く。この様に旅から旅への生活の中で上記三作品は書かれた。

1918年十二月にイギリスのバークシャー (Berkshire) で書き始められた *Aaron's Rod* は、一時中断したが、1921年五月に漸くイタリーで完成した。

この小説の題名は、聖書の「出エジプト記」から出たものであろう。また旧約全書の民数紀略第十七章には次のような文章が見える。

主は、モイゼにおおせられた、「イスラエルの子らに、各部族、つまり各部族長に、各一本の杖、合計十二本の杖をもってこさせるように命じなさい。各部族長のための杖は、それぞれ

ただ一本でなければならぬ。それぞれの杖に持ち主の名前をしるしなさい。レヴィ〔族〕の杖には、アアロンの名前を書きなさい。あなたは、それらの杖を、私がつねにあなたに会う、あかしのまえ、集いの天幕のなかにおきなさい。私がえらんだ人の杖に花が咲くだろう。(略) その翌日、モイゼがあかしの天幕のなかに入ってみると、レヴィ族のアアロンの杖には、花が咲いていた。つまり、その杖は、ひこばえをだし、花を咲かせ、すでに熟した、はたんきょうの実をつけていた。(註1)

Aaron Sisson が聖書の Aaron ならば、影の如く彼のそばに寄りそって、色々の忠告や助言を与えている Lilly は Moses である。出エジプト記第七章に「主はモイゼにおおせられた、『(略) 兄のアアロンはあなたの代弁者となる』」(註2) と述べられている。旧約聖書では Aaron は Moses を助け、イスラエルの民を率いてエジプトに逃れるが、この作品では Aaron は妻子との愛の家庭から逃れて、Lilly と親交を結びながら、自己の個の確立をめざすのである。

Aaron's Rod とは主人公 Aaron Sisson の持っている笛の事を表わすと同時に、上記の様に新しい生命を開かせる奇跡の杖を意味している。この物語の結末部分で、彼のフルートがあるカフェで爆弾の破裂の為に壊れた時、彼は自分の生命の象徴が紛砕された事を悟るのである。

さて主人公 Aaron Sisson は可成り裕福な暮らしをしている、或る炭坑会社に勤める、坑夫の計量係である。趣味はフルートを吹く事で、家庭は妻の Lottie と三人の子供がいる。彼は三十三才の好男子で、妻にも愛され、戦争も終って平和な落ち着いた家庭の主人である。表面上は満足な生活をしている様な彼は、或るクリスマス・イヴに近くの酒場に何時もの様に出掛ける。だがそのまま、彼は戻って来なかった。行き掛けに買って来てくれる様頼まれた、ロウソク迄買ったのにも拘らず。

Aaron は自己中心の孤独を求め、自分自身でありたかった。妻 Lottie の押しつける様な愛情、彼のすべてを奪おうとする愛情から身を守り、自己の独立を保ちたかった。特別な取り立てて言う程の家出の理由がある訳ではなかったが、家には戻らなかった。クリスマスの二、三日後に彼はそっと我家の居間に忍び込む。懐かしさは胸にこみ上げて来るが、鏡に映る自分の姿を見て犯罪者の様に感じる。娘の一人が病気で医者が来ている。妻と医者との対話を耳にすると自分が a pillar of Salt (塩の柱) となってしまった様な気持となり、フルートとピッコロの入った袋を持って、再び暗闇の中に出て行ってしまふ。

彼は、ロンドンに出てコヴェント・ガーデンのオーケストラに入り、フルートを吹いている。そこで、彼の家出の晩に泊めてもらった、Jim Bricknell 達と再会する。その仲間の中には、作家の Rawdon Lilly と妻の Tanny がおり、Aaron と知り合いになる。Lilly は四月の始めの或る寒い曇りの日、黒い外套、山高帽の男が、ふらふら歩いているのを、彼のコヴェント・ガーデンの市場を見下す部屋から見た。それは流行性感冒にかかった Aaron であった。早速、自分の部屋で介抱してやる。Aaron は Jim Bricknell の婚約者 Josephine Hay の誘惑に負け、妻 Lottie や子供の事を思って、精神的苦悩を得、更に身体を衰弱させていた。医者が来て見てくれたが一向によ

くならない。Lilly は、「母親が腹の悪い赤ん坊を擦る様に」Aaron の腹部に、ついで下半身全体に樟脳油を塗り、「無我夢中に」マッサージをしてやるのだった。やがて Aaron は元気を取戻して来て、気持ちよく寝入った。

この行為は Lawrence が幾度も説いて来た、Blutbrüderschaft の様な (*The White Peacock* で水泳の後、Cyril の身体を George が拭いてやる場面、*Women in Love* で Birkin と Crich がレスリングをする場面の様な) 儀式が暗示されている。この後、Aaron は Lilly に心を惹かれてゆく。Aaron と Lilly は共に Lawrence の分身であると Hough は言っている(註3)——

The fact is that Lawrence has split his own consciousness between two characters in the story——Aaron and Lilly. Lilly is Lawrence the prophet, and Aaron is the escaped denizen of Eastwood.

実際ロレンスは物語の中で、二人の登場人物の間に彼自身の意識を分割している—即ちアロンとリリーにである。リリーは予言者ロレンスであり、アロンはイーストウッドの逃亡者である。(筆者訳)

また Moore はこの二人の関係に Lawrence と J. M. Murry の投影を見る(註4)——

There is a good deal of the Lawrence-Murry relationship here : the similarity goes deeper than Lawrence's nursing of Murry during a spell of grippe in Sussex in 1951.

ここにはロレンスとマリーの大いなる関係がある。その類似点はロレンスが1951年サセックスで暫く流行性感冒に倒れたマリーを看護した事より大きい。(筆者訳)

彼らは大変に気が合う様になる。現代に於ける結婚制度には二人共大いに不満な点がある。結婚とは女が男を道具扱いにして、子供と共に男をおさえつけておく事だと言う。Lilly は言う——

There's something wrong with marriage altogether, I think. *Egoïsme à deux*——”

“What's that mean?”

“*Egoïsme à deux*? Two people, one egoism. Marriage is a self-conscious egoistic state, it seems to me.”

“You've got no children?” said Aaron.

“No. Tanny wants children badly. I don't. I'm thankful we have none.”

“Why?”

“I can't quite say. I think of them as a burden. Besides, there *are* such millions and billions of children in the world. And we know well enough what sort of millions and billions of people they'll grow up into. I don't want to add my quota to the mass—— It's against my instinct——”

“Ay——!” laughed Aaron, with a curt acquiescence.

“Tanny's furious. But then, when a woman has got children, she thinks the world

wags only for them and her. Nothing else. The whole world wage for the sake of the children—and their sacred mother.”

“Ay, that’s *damned* true,” said Aaron.

(Chap. IX)

「全く結婚には間違っただけがあると思う。エゴイズム・アデュー——」

「どういう意味？」

「エゴイズム・アデューか？ 二人の人間、一つの利己主義。結婚とは自意識の利己状態だと僕は思う」

「子供はないのか」エァロンはいった。

「ない。タニイはとても子供を欲しがっている。僕は欲しくない。僕は我々に子供の無いのを有難いと思っている。」

「どうしてだ」

「はっきりとはいえない。僕は子供は重荷だと思っている。それに世界中には何億何十億という子供がいる。そして彼等がどんな何億何十億の大人になって行くかよくわかっている。僕の持分をこの群の中へ増したいとは思わない——それは僕の本性に反する——」

「ふん！」とエァロンは簡単に認めて笑った。

「タニイは熱烈だ。しかし女なんてものは子供が出来たら、世界は子供と自分のために動くんだと思うんだよ。他の何でもなし。全世界は子供と、それからその神聖なる母親のために動くものだと」

「ふん、それは全く本当だよ」とエァロンはいった。(註5)

この様に結婚制度の問題で意見が一致した二人は更に話を続ける。Lilly は二人の人間が理解し合うのは、各々が自分の魂を忍耐と安らぎのうちに所有する事であり、その時二人は結合しながら同時に分離していて、互いに自由でありながら、しかも永遠に離れないのだと言う。二人の話は続く。

“I’m learning to possess my soul in patience and in peace, and I know it. And it isn’t a negative Nirvana either. And if Tanny possesses her own soul in patience and peace as well—and if in this we understand each other at last——then there we are, together and apart at the same time, and free of each other, and eternally inseparable. I have my Nirvana——and I have it all to myself. But more than that. It coincides with her Nirvana.”

“Ah yes,” said Aaron. “But I don’t understand all that word-splitting.”

“I do, though. You learn to be quite alone and possess your own soul in isolation——and at the same time to be perfectly *with* someone else——that’s all I ask.”

“Sort of sit on a mountain-top, back to back with somebody else, like a couple of idols.”

“No——because it isn’t a case of sitting——or a case of back to back. It’s what you get to after a lot of fighting and a lot of sensual fulfilment. And it never does away with the fighting and with the sensual passion. It flowers on top of them, and it would never flower save on top of them.”

“What wouldn’t?”

“The possessing one’s own soul——and the being together with someone else in silence, beyond speech.” (Chap. X)

「僕は忍耐と平和の裡に自己の魂を持つことを学んでいるのだ。僕にはそれがわかる。それは又消極的な涅槃なんかじゃない。そして、もしタニイも亦忍耐と平和の裡に彼女自身の魂を持つならば——そうしてかくして遂に我々が相互に理解するならば——その時こそ我々は共にいて、しかも同時に離れてもいられるのだ。たがいに自由でありながら、しかも永久に離れないのだ。僕は自分の涅槃を持っている。——自分だけで持っている。しかしそれだけでない。それは彼女の涅槃と符節を合わすのだ」

「いかにも」とエァロンはいった。「しかし僕にはそんな言葉の穿鑿は全然わからない」

「しかし僕はわかる、君は一人ぼっちでいて、孤独に於いて自己の魂を持ち、そして同時に他の誰かと完全に共にいるということを学ぶであろう。僕が求めるのはこれだけだ」

「山の頂きで、おたがいに背中合せの二つの偶像のような坐り方だね」

「いや、坐り方の問題でも、背中合せの問題でもない。それこそ、君が多くの戦いと、多くの肉慾の完成の後に達し得るものだ。それは戦いと肉慾の完成を遠ざけるものではない。それはこれらのものの上のみ花開き、これらのものの上以外では花開かない」

「何だろう」

「君の魂を持つこと——言葉を超越して沈黙の内に他の誰かと共にいること」

男女各々が独立した自我を保ちつつ結びつくと、Lilly が言ったのは、Lawrence の考えている理想的な両性関係であった。創造の象徴である女から逃れよう、自分の自我を保っておこうという Lawrence の気持の表われであった。

この二人の友好状態も長くは続かなかった。戦争に参加した事のある一人の陸軍士官が彼らの所にやって来て、戦争の話をする。夜遅く迄話して、彼が帰った後、Aaron は Lilly と意見が合わなくなり口論となる。Lilly は「戦争が偽りであると知っていた。人道的に全く偽りである」と言い、且つ毒ガス使用について非難すると、Aaron は力の政治を認め毒ガス使用を弁護さえた。これに怒った Lilly は Aaron と絶交する。Aaron が言う——

“Everybody’s got to agree with you——that’s your price.” (Chap. X)

「誰もが君の意見に賛成しなければいけないんだね——それが君の報酬なんだ」

暫くの沈黙の後 Lilly が Aaron の所に来て激しく言う——

“I’m *not* going to pretend to have friends on the face of things. No, and I *don’t* have friends who don’t fundamentally agree with me. A friend means one who is at one with me in matters of life and death. And if you’re at one with all the rest, then you’re their friend, not mine. So be *their* friend. And please leave me in the morning. You owe me nothing, you have nothing more to do with me. I have had enough of these friendships where I pay the piper and the mob calls the tune. (Chap. X)

「僕は上っ面だけで友人を持っているふりをしたくない。僕は僕と根本的に一致しない友達なんかは持たないんだ。友人というのは生死に関して一になるものことだ。もし君が他のものと一致するならば君はそのものの友達で、僕の友達ではない。だからそのものの友達になればいい。そして明日の朝は僕を一人にしてくれ。君は僕に何ら負担はない。何ら僕と関わりはない。笛吹きに僕が金を払って、吹く曲は弥次馬が命じる——そんな友情はまっぴらだ。」

Lilly は Aaron が究極的には、自分と同意見にはなり得ない事を感じている。彼は創造者として、Aaron に生きた関係を求めた。「他者の魂に立ち入って要求」したが、Aaron は「魂の戸口」を閉じてしまった。Lilly はそのお返しをする様に「普通の訪問者に向って普通の家の戸を閉める」が如く、Aaron に黙って地中海に向って去ってしまう。

この場面の Lilly と Aaron の議論のやり取りは、Lawrence の自分自身との対話である。又その議論には、Lawrence の戦争不参加から来る劣等感、不参加によって害われたと感じられた自分の女に対する立場から、男との関係へ移りたいが、男の関係とて自分の希望通りにならないという Lawrence の気持の動きが反映していると Hough は言う。(註6)

If one had to interpret these Aaron-Lilly exchanges as a phase of Lawrence’s own experience, it could only be as a dialogue of Lawrence with himself—a fairly honest if not a particularly edifying one. Lawrence hates the war, but, I am convinced, feels a deep inferiority for not having been in it. He feels both his position among men and his standing with women, his sexual authority, to be deeply impaired by his non-participation in the crucial experience of his time. The sense of failure with women is so strong that he is almost in a mood to reject them altogether. He wishes therefore to transfer some of his emotional energy into a relation with a man; but he is clear-sighted enough to see that this is unlikely to work, that men do not respond easily such emotional demands. The real solution to all such interpersonal dilemmas is the singleness-in-relation that he has described so often. But this is something merely hoped for rather than securely possessed.

もしこれらのアーロン＝リリーのやり取りをロレンス自身の経験の一部として解釈するなら、それはロレンスの自分自身との対話としては可能であろう。特に教訓を与える様なものではないとしても可成り率直なものである。ロレンスは戦争を憎んでいたが、それに参加しなかつ

たという深い劣等感を抱いていた、と私は思う。彼は男達の中に於ける自分の位置と、女との自分の立場即ち性的権威との両方が、その時代の苦しい経験における戦争不参加によって著しくそなわれたと感じた。女性との間での挫折感は非常に強く彼は殆んど女性を全く拒否する気持になった。その為彼は情緒的エネルギーの幾分かを男性との関係に変えたがっているのだ。しかしこれはうまくゆく見込みがなく、男性はこの様な情緒的要求に簡単には答えないという事を彼は聰明にも分っていた。このような個人的相互関係のディレンマに対する真の解決は、彼が幾度も述べてきた相互関係に於ける孤立である。しかしこれは安全に保持されるというよりむしろ、単に希求されるものである。(筆者訳)

Aaron は一旦、自分の妻の元に戻ってみる。とりすがる Lottie の女性的な訴えの下に脅迫の剣のあるのを感じた彼は、たまらない思いになり、彼女に気付かれずに家を出て行くのであった。彼は乾草の上に寝ころがって秋空の星を眺めながらこう考えた――

The illusion of love was gone for ever. Love was a battle in which each party strove for the mastery of the other's soul. So far, man had yielded the mastery to woman. Now he was fighting for it back again. And too late, for the woman would never yield.

But whether woman yielded or not, he would keep the mastery of his own soul and conscience and actions, He would never yield himself up to her judgment again. He would hold himself for ever beyond her jurisdiction. (Chap. XI)

恋愛の夢は永久に去ってしまった。恋愛とは双方が双方の魂を占領しようとする戦いである。今までのところは男の方が女に負けていた。今それを取戻そうと戦って来たのだ。しかし時已に遅し、女の方も屈しはしない。

しかしたとえ女が屈しようが、屈しまいが、彼は自己の魂と、自己の良心と、自己の行動の確保を保障して行かねばならない。彼は再び彼女の裁断に屈することはない。彼は彼女の司法権の外に身を置く。

彼は Lottie が「一人でいて、自己を歪める男のいない時こそ、遙かに真実に彼女自身であり得る事」を知り「清浄な別れと完全な孤独」こそが「究極的な本当の調和に至る道」だと思う。彼は単に各自が自己を保つのみならず、男性の優位を獲得したく願っている。

イタリアに行きは Lilly を追って、Aaron はノヴァラ (Novara) の Sir William Franks の邸に行くが、Lilly は既にもういない。この邸で Aaron は、一人で異郷の日曜日の夜を過しながら、妻 Lottie の事を思う。気が滅入り、元気のない彼は、家を出て来た事をふと後悔しそうな気分になる。しかし今こそ家出の原因を自分で振り返るのだ。

First and single he felt, and as such he bore himself. It had taken him years to realise that Lottie also felt herself first and single: under all her whimsicalness and fretfulness was a conviction as firm as steel: that she, as woman, was the centre of creation, the man was but an adjunct. She, as woman, and particularly as mother, was

the first great source of life and being, and also of culture. The man was but the instrument and the finisher. She was the source and the substance. (Chap. X III)

彼は最上にして、孤独であると考え、そしてそのように振舞った。ロティも又彼と同様に最上にして孤独であると考えていることが彼にわかったのは大分年が経ってからだ。彼女の気まま、気むずかしさのかけに鋼鉄のような意志があることと、女性として自分は創造の本源であり、男の如きは付属物と考えていることがわかった。自分は女として、特に母として、生命、存在、並びに文化の大根源である。男子は単に道具であり、仕上げ職人である。自分は根源であり、本質である。

これは、*The White Peacock* の Cyril の母親 Mrs Beardsall, *Sons and Lovers* の Mrs Morel を我々に思い出させる。「大地の母」の概念である。尤も Lottie はこの信念を自分で公式化していた訳ではない。

She did but inevitably represent what the whole world around her asserted: the life-centrality of woman. Woman, the life-bearer, the life-source. (Chap. X III)

彼女は彼女の周囲が確認している女性中心という事実を単に表わしているにすぎない。女は生命を結ぶもの、生命の根源である。

今日の古くさいキリスト教の時代では、「男は与え、女は受ける。男は贈るもの、女は受けるものである」。Lawrence にとっては、これは我慢出来ない事である。女の奉仕者、隷属者としての男。男にとってこの様な惨めな状態での既製の結婚制度——

This is the sacrament we live by; the holy communion we live for. That man give himself to woman in an utter and sacred abandon, all, all, all himself given, and taken. Woman, eternal woman, she is the communicant. She receives the sacramental body and spirit of the man. (Chap. X III)

これは我々がよってもって生きる式典でありよってもって生きる聖餐である。男は自己を全部神聖に放棄する、自己全部を与え捨てる。女は、久遠の女性は、聖餐にあづかるものである。彼女は男の聖なる肉体と精神を受ける。

これは真の理想的な男女関係ではあり得ない。一方が他方の犠牲となったり、従属物になると、その関係は終局的には崩解の道をたどる事となる。それではならない。「恋愛という経過の完成は、男にとっても、女にとっても、単純な純粋な自己確保の状態に到達する事である」(The completion of the process of love is the arrival at a state of simple pure self-possession, for man and woman.) 男女の愛は人間の魂の完成を旨とする一過程と Lawrence は考えている。そして魂の完成とは「純粋にして寛大な個の姿」である。ここでは *Woman in love* の「星の均衡」が変化して、中空に交わる鷲の結合の比喩を以て語られる。

As for considering the lily, it is not a matter of consideration. The lily toils and spins hard enough, in her own way. But without that strain and that anxiety with which we try to weave ourselves a life. The lily is life-rooted, life-central. She *cannot* worry. She is life itself, a little, delicate fountain playing creatively, for as long or as short a time as may be, and unable to be anxious. She may be sad or sorry, if the north wind blows. But even then, anxious she cannot be. Whether her fountain play or cease to play, from out the cold, damp earth, she cannot be anxious. She may only be glad or sorry, and continue her way. She is perfectly herself, whatever befall! even if frosts cut her off. Happy lily, never to be saddled with an *idée fixe*, never to be in the grip of a monomania for happiness or love or fulfilment. It is not *laissez aller*. It is life-rootedness. It is being by oneself, life-living, like the muchmooted lily. One toils, one spins, one strives: just as the lily does. But like her, taking one's own life-way amidst everything, and taking one's own life-way alone. Love too. But there also, taking one's way alone, happily alone in all the wonders of communion, swept up on the winds, but never swept away from one's very self. Two eagles in mid-air, maybe like Whitman's Dalliance of Eagles. Two eagles in mid-air, grappling, whirling, coming to their intensification of loveoneness there in mid-air. In mid-air the love-consummation. But all the time each lifted on its own wings: each bearing itself up on its own wings at every moment of the mid-air love consummation. That is the splendid love-way.

(Chap. X III)

百合のことを考えても、それは考慮の問題ではない。百合は百合なりに一生懸命につとめ紡ぐ。しかしそれは我々が人生を紡ぐようなそんな困苦や不安を持ってはいない。百合は生の根を張り、生を中心を据えている。百合には心労があることはない。百合は生命それ自身であり、創造的に噴出する小さな美しい噴水で、生命のあらん限り、長くも短くも、不安があり得ない。北風が吹けば百合も悲しく嘆くであろう。しかしその時でさえ彼女は不安であり得ない。彼女の噴水が、冷い濡れた大地から噴出しようがしまいが彼女は不安であることはない。彼女はただ喜ぶか嘆かのちがいで、自分の道をひたすら行く。何が起ろうとも、霜が彼女を切ってしまうとも、彼女は彼女自身完全である。幸福なる百合——固定観念にわずらわされず、幸福、恋愛、完成などの偏狂に苦しめられない。といって勝手気儘でもない。生の根がついている。それは多くの論議されたあの百合のような自己のみの存在であり、生命を生きることである。人は、百合と同様につとめ、紡ぎ、働く。しかし彼女同様に、総てのものの内において、自己の生命の道を歩むことと自己の生命の道をただ一人歩むことはどうであろう。愛も又。しかし自己の道を一人で歩み、あらゆる交わりの奇異の内において一人で幸福に、あらゆる風に吹かれても。自己自身を吹き倒されることはない。ホイットマンの「大空の戯れ」のような、空中の二羽の鷲にも似ている。大空の二羽の鷲は羽搏ち、輪を描き、そしてその空の上

で、彼等の愛の合一の高頂に達する。中空に於ける愛の完成。しかし絶えずそれぞれ自分を自分の羽にのせている。中空に於ける愛の完成のその瞬間に於てさえ、それぞれ自己の羽で支えている。これこそすばらしい愛の方法だ。

各々が相手に頼る事もなく頼られる事もなく、奪う事も奪われる事もなく、従属関係もなく、それぞれが個を完全に保持しつつ結びつく事——すばらしい愛の方法である。Aaron は Lottie との長い間の戦いの後、遂に自己に帰す事が出来た。彼は人生に深く根を下してその不安を無くした者の様に平和になる事が出来た。

その後、フィレンツェへ行く。そこで Marchesa del Torre と知り合う。歌手である彼女は最近声がよく出ない。ところが、Aaron の笛の伴奏では、なめらかに歌える。そして二人は遊戯的な恋愛に走る。だが、ここには真の愛と言うべきものがなかった。彼は自分が神でありかつ犠牲でもあるという状態になり、相手が絶対的な女祭司になった様な奇妙な関係を見出す。

She was absolutely gone in her own incantations. She was absolutely gone, like a priestess utterly involved in her own terrible rites. And he was part of the ritual only, God and victim in one. God and victim. All the time, God and victim. When his aloof soul realised, amid the incantation, how he was being used—not as himself, but as something quite different: God and victim; then he dilated with intense surprise, and his remote soul stood up tall and knew itself alone. He did not want it—not at all. He knew he was apart. And he looked back over the whole mystery of their love contact. Only his soul was apart. (Chap. XIX)

彼女の方は彼女自身の呪文に絶対的である。彼女は、恐しい祭典に夢中の女祭司のように絶対的である。そして彼はただその祭典の部分で、神と犠牲の一つになったものである。神と犠牲。彼の遠くにある魂が、この呪文の中であって、彼が如何に利用されているかを質感する時——彼自身としてでなく、全く別なものとして、神として犠牲として利用されていることを実感する時、その時彼は強い驚きと共に拡大し、彼の不思議な魂が雄々しく立上り、その孤独であることを知る。彼はそれを欲しない——少しも欲しない。彼は自分が別に離れていることを知る。そこで彼は振りかえって彼等の愛の交りの一切合財の神秘を見る。彼の魂のみが離れている。

彼は妻 Lottie の彼に対する「服従」を要求する愛から逃れて、フィレンツェ迄やって来た男である。ところがここでも同じ様な型の愛の要求に出会ってしまう。彼は恋愛に於いて、自己の保持のむずかしさを痛感する。

その伯爵夫人との火遊びの日の晩、Aaron はと或るカフェーに行くと、そこでは Lilly と他の社会主義者達が集って、前日の社会主義の威示運動や、愛の衝動、権力の衝動などについて議論している。突然、カフェーの前で爆弾が爆発し、大騒ぎとなり、Aaron の笛はその騒動の中でこさ

れてしまう。生活の手段でもあり、生の象徴でもあった笛を無くした時、彼はそれが彼の魂の中の何かと一致した事を感じた。「壊れたフルート、これでおしまい。」

常に噴出し続ける生命の源泉を象徴する予言者たる Lilly は、Aaron に愛のみに心をつかうのは虚しい事であると語る。即ち、人間には愛の衝動と権力の衝動とがあり、これ迄は前者によって生き様として来たが、愛の衝動は最早涸渇してしまった。それ故、それによって何の進歩も望めないのである。Lilly が愛の衝動の涸渇について語る――

“We’ve exhausted our love-urge, for the moment. And yet we try to force it to continue working. So we get inevitably anarchy and murder. It’s no good. We’ve got to accept the power motive, accept it in deep responsibility, do you understand me? It is a great life motive. It was the great dark power-urge which kept Egypt so intensely living for so many centuries. It is a vast dark source of life and strength in us now, waiting either to issue into true action, or to burst into cataclysm. Power—the power-urge. The will-to-power—but not in Nietzsche’s sense. Not intellectual power. Not mental power. Not conscious will-power. Not even wisdom. But dark, living, fructifying power. Do you know what I mean?” (Chap. XXI)

「我々は今のところ我々の愛の衝動を尽してしまった。しかも我々はそれを無理にもつづけて動かそうとしている。そこで我々は必然的に無政府主義者となり殺人者となる。それはいけない。我々は力の動因を認めなければいけない。その強い責任を認めなければいけない——僕のいうことがわかるかね？ それは偉大なる生命の動因である。あんなに幾世紀もの間エジプトを強く生かしたのはこの偉大な不思議な力の衝動である。それは今我々の内なる生命と力の広大な不思議な源泉であり、遂んで真の行為となんらか変じて大動乱とならんかとしている。力——力の衝動。意志の力ではあるがニィチェのいう意味ではない。知力でもない。精神力でもない、意識の意力でもない。知慧でもない。不思議な生きた実を結ぶ力である。僕のいうことがわかるかね」

力の衝動の中には、愛に於いて、愛するものと愛されるものがある様に、駆り立てられるものと、立てるものがある。愛の衝動では女は愛されるものであるが、力の衝動では女は「何か深い深いもの」「力と誇りの不思議な運動をしている魂」に従わなければならない。屈従でも奴隷でもない。「深い測り知れない自由な服従」をしなければならない。と、Lilly は説く。これは Birkin の「星の均衡」の線上にはあるが、微妙な変化を見せている。Lilly は女が男の魂を一方的に支配するという「愛」の関係を否定し、男に対する女の「卑屈な追従」ではない、男への女の「服従」を主張するのである。

今や我々は偉大な生の動機たる権力の動機を見出さなければならない。自分自身の権力を見出す為に、人は先ず自分の権力より優れた権力に従う事を学ぶべきである。この小説の終章で、次の様な Aaron と Lilly との対話がある。

All men say, they want a leader. Then let them in their souls *submit* to some greater soul than theirs. At present, when they say they want a leader, they mean they want an instrument, like Lloyd George. A mere instrument for their use. But it's more than that. It's the reverse. It's the deep, fathomless submission to the heroic soul in a greater man. You, Aaron, you too have the need to submit. You, too, have the need livingly to yield to a more heroic soul, to give yourself. You know you have. And you know it isn't love. It is life-submission. And you know it. But you kick against the pricks. And perhaps you'd rather die than yield. And so, die you must. It is your affair."

There was a long pause. Then Aaron looked up into Lilly's face. It was dark and remote-seeming. It was like a Byzantine eikon at the moment.

"And whom shall I submit to?" he said.

"Your soul will tell you," replied the other. (Chap. XXI)

総ての者は、指導者を望むといている。然らば彼等をして、彼等の魂に於てそれより偉大なる魂に服従せしめるがいい。現在、彼等が指導者を望むといている意味は、ロイド・ジョージのような道具を欲しているのだ。彼等の使用する単なる道具を。しかしそれ以上である。それは逆である。それは偉大なる人間の内なる英雄的な魂に対しての深い測り知り難い服従である。エァロン、君も又服従する必要がある。君も又君以上の英雄的な魂に生きて服従し、身を捧げねばならない。その必要を君は知っている。それが愛でないことを君は知っている。それは生命の帰順だ。そしてそれを君は知っている。しかるに君はとても敵わぬものに齒向うのだ。そして服従するよりは死んだ方がいいと思っている。だから、君は死ななきゃならない。それは君の問題だ」

長い沈黙がつづいた。やがてエァロンはリリーの顔を見上げた。それは不思議な理解し難いものだった。その瞬間ビザンティンの肖像のようだった。

「それで僕は誰に従うのかね」と彼はいった。

「君の魂が教えてくれるだろう」と相手はいった。

権力の衝動が、その中にこそ存在する最も英雄的な優者としての男性を夢見る Lilly、即ち作者 Lawrence はこう言いたかったに違いない。

「僕にだよ、君」

女性に対する男性の優位、その男性の中での英雄的な優者にならんと願望する Lawrence。これはともすれば実生活での Frieda との関係に於いて敗北を喫っしがちな自分を、優位に立たせ様とする、懸命な Lawrence の努力の表れであった。

作者 Lawrence 自身が政治運動の指導者になった場合を想定して、自分はその場合どうするかを吟味した白昼夢と言われる *Kangaroo* は、1922年オーストラリアのシドニーで極めて単期間に

書かれた。これも *Aaron's Rod* と同じく旅行記を背景に、*The Fantasia of the Unconscious* で展開された哲学——性の問題、結婚の問題、男性対女性の問題等——を具体化して、物語を創作したものである。*Aaron's Rod* に於いては、男性の女性に対する奉仕を否定し、男性の優位を説き、男性と女性の結合に主人公は到達した。*Kangaroo* では男性同志の関係が政治的色彩を帯びて来る。そして主人公は政治的運動に携わる様に運命づけられているが、結局は政治運動からは離れてゆく。ここで Lawrence の思想的屈折が行われざるを得ない。

主人公 Richard Lovat Somers は、感受性の鋭い静かな文学者で、ヨーロッパの中ではすべては終り、かたをつけられたと考え、一番新しい国オーストラリアに、ドイツ貴族出身の妻 Harriet とやってくる。明らかに Somers は Lawrence 自身であり、Harriet は妻 Frieda の分身である。だが着く早々 Somers はヨーロッパの変化に富んだ美しさに郷愁を覚える。オーストラリアは彼にとって余りにも広大であり過ぎた。ここは民主主義の国である。自由の国である。しかし、ここでは民主主義はオーストラリアを無秩序の状態にしたままで、その状態から救う権威のない事を意味する。また自由は、空虚で内面的な意味が欠けており、空な集積があるばかりである。Somers は完成された自由という絶望的なむなしさを感じる。

Somers 夫妻はシドニーの町はずれに住みつくと、すぐに隣人の Jack Callcott と知り合いになる。Harriet が最初、植民地の人間らしく、明けっぱなしな Callcott 夫妻と知り合いになるが、孤独を欲する Somers は仲々心をうちとけ様としない。だが、徐々に Somers も心を開いてゆくのである。或る日曜の朝、Callcott は自分の妹の夫である Willam James Trehwella (Jas, Jaz) の家に、Somers をお茶に誘う。Somers は Callcott がオーストラリアの政治の将来に関心を持っているのを知る。Callcott は Somers の思想に共鳴出来る点を見出し、自分の関係している the Diggers' Clubs の事を、彼に話す。それは復員軍人の秘密組織であり、この国の危急存亡の機には、実権を握って国を救おうとするものである。

Callcott は Somers に法律家 Benjamin Cooley に合わせる。Cooley は the Diggers' Clubs の首領で、容貌がカンガルーに以ている為、Kangaroo という名で通っている。Somers には彼は不思議な魅力と威厳とがあると感じられる。彼に共感を持つが、Somers は政治運動の為に自分自身を犠牲にしたり、Kangaroo の指導に服従したりしようとは思わない。

一方、Harriet は毎晩の様に夫がこの政治運動に関係する人々の所に出掛けて行って、自分の事を振り返ってくれないのに大きな不満を持っている。妻は自分から離れ去ろうとする夫を引止めようとする。夫は妻に奉仕する事から逃れて、政治運動に専心する事で、男性としての自尊心を保とうとする。始めは Somers は孤疑、逡巡していたのであるが、段々この政治的地下運動に巻き込まれてゆく。この the Diggers' Clubs の魅力は、彼にとってはそのまま指導者の Kangaroo の魅力である。Kangaroo は有能な指導者であるが、愛の支配を説く。彼の意図する政治は、「静かな慈父の政治」の様な官憲政治である。だが、政治には愛でなく、権力が重要な意味を持つとする Somers には Kangaroo に同調出来ない。

妻の手を振り切って迄、彼は政治運動を続けてゆこうとする。しかし Callcott の the Diggers'

Clubs への加入の勧誘を受け入れ様としたが、「なにものかが、あたかも見えざる手」が彼を阻止した。Somers は「何か生き生きとした関係」を求めていたのであって、同志愛とか同胞愛などを求めていたのではない。「生き生きとした関係」というのは、「主権の神秘」とか「天賦の、自然の、神聖な優者の神秘」という神秘的関係である。この様な関係を求めていた Somers は Callcott の勧誘を断った。Kangaroo の説く愛について Somers はこう言う——

“I know your love, Kangaroo. Working everything from the spirit, from the head. You work the lower self as an instrument of the spirit. Now it is time for the spirit to leave us again; it is time for the Son of Man to depart, and leave us dark, in front of the unspoken God: who is just beyond the dark threshold of the lower self, my lower self. There is a great God on the threshold of my lower self, whom I fear while he is my glory. And the spirit goes out like a spent candle.” (Chap. VII)

「僕は君の言う愛を知っているよ、カンガルー。魂から、頭から、すべてのものを働かせる事なのだ。今や魂が再び我々から離れてゆく時だ。人の子キリストが立ち去り、無言の神の前で、我々を暗闇の中に残しておく時だ。その神は下部の自己の、私の下部の自己の戸口の丁度向う側にいるのだ。私の下部の自己の戸口に偉大なる神がいる。彼が輝ける者である間は、私は彼を恐れる。そして魂は燃え尽きたロウソクのように消えてしまうのだ」^(註7)

Somers は Kangaroo には闇の神の様なものを持って来るのである。

“(the Great God who) Enters us from the lower self, the dark self, the phallic self, if you like.”

“Enters us from the phallic self?” snapped Kangaroo sharply.

“Sacredly. The god you can never see or visualise, who stands dark on the threshold of the phallic me.” (Chap. VII)

「下部の自己、暗き自己、もしよければ男根的自己から、我々の中に入り込む（あの大いなる神）。」

「男根的自己から我々の中に入り込むんだって？」

「神聖に。君が見たり、心に描いたりする事の出来ない神だ。男根的自我の戸口の上の暗闇の中に立っているのだ」

そして彼は Kangaroo に更に暗の神の事を説明する。

“I think love, all this love of ours, is a devilish thing now: a slow poison. Really, I know the dark god at the lower threshold—even if I have to repeat it like a phrase. And in the sacred dark men meet and touch, and it is a great communion. But it isn't this love. There's no love in it. But something deeper. Love seems to me somehow trivial: and the spirit seems like something that belongs to paper.” (Chap. VII)

「愛、我々のあらゆるこの愛は今や恐ろしいものであり、利目のゆるやかな毒薬であると、私は思う。実際私は下部の戸口にいる暗闇の神を知っている——例え私がきまり文句の様にそれを繰返さなければならぬとしても。そして、その神聖なる暗闇の中で人々は出会い、触れ合う。それは偉大な交わりなのだ。だがそれはこの愛ではない。その中には愛はない。だが更に深い何ものかがある。愛は私にとってはどういうものか些細なものに思える。そしてその魂は論文に属するものの様に思える。

今度は Somers は Jaz によって、Kangaroo の対立者である労働党の William Struthers に引き会わされる。Struthers の主張するのは一種の平等主義である。Somers はそれに惹かれはするが、個人差を信じる彼にはそれに同意出来ない。それ故に、Struthers に「真面目で、建設的な社会主義新聞」の編集を依頼されても Somers は拒絶する。「愛の服従と献身」を旗印にした Struthers にも彼は「暗闇の神」を持ち出し、それに比して愛の神は卑少な存在に過ぎないと言う。そして更に——

“With no deep God who is source of all passion and life to hold them separate and yet sustained in accord, the loving comrades would smash one another, and smash all love, all feeling as well. It would be a rare gruesome sight.

Any more love is a hopeless thing, till we have found again, each of us for himself, the great drak God who alone will sustain us in our loving one another. Till then, best not play with more fire.”
(Chap. XI)

「あらゆる情熱と生命の源であり、その二つを引離しておくが調和して維持される様にしている深い神がなければ、愛し合う仲間はお互いを粉碎し合い、また同様にすべての愛、すべての感情をも粉碎するであろう。それは大変なぞっとする様な光景であろう。

我々各々が再び、自分の力で、我々がお互いに愛し合うのを只一人保証してくれるあの偉大なる闇暗の神を見つける迄、これ以上愛というものは絶望的なものである。その時迄、もう火遊びをしない方がいい。

と言い切る。

Somers はオーストラリア社会の「洗いざらしのいばった中産階級」(the great Washed Middle Classes)に対して、左右両陣営の人々が、共に飽き足らずに思っている事は理解出来たに相異なる。しかし、彼はどちらの陣営も結局「愛」を旗印にした理想主義の裏に、人間性の醜さや頼りなさを隠しているのを見ぬいたのだ。

Yet the human heart must have an absolute. It is one of the conditions of being human. The only thing is the God who is the source of all passion. Once go down before the God-passion and human passions take their right rhythm. But human love without the God-passion always kills the thing it loves. Man and woman virtually are killing each other with the love-will now. What would it be when mates, or comrades,

broke down in their absolute love and trust? Because, without the polarised God-passion to hold them stable at the centre, break down they would. (Chap. XI)

しかも人間の心は絶対的なものを所有しなければならない。それは人間の条件の一つなのだ。只一つのはあらゆる情熱の源である神である。ひとたび神の情熱の前に下りよ、そうすれば人間の情感は自らの正しいリズムを持つであろう。しかし神の情熱のない人間の愛は常にそれが愛するものを殺す。男と女は実質的に現在、愛の意志をもってお互いを殺し合っている。仲間であれ同志であれ、自分達の絶対的な愛や信頼が壊れた時、一体それは何になるだろう。というのは中心で彼を安定させてくれる極性を与えられた神の情熱がなければ、彼らは必ずや壊れるであろう。

Somers は表面的に人とつき合い生きてゆくという事を否定し、「人類」から離脱しようとする。新社会建設という政治運動からも身を引き、闇の神という神秘的存在のみを信ずる様になった。

Lawrence は Harriet との Somers の夫婦生活に於ける男女の闘争をも、闇の神を通じて解決しようとしているのだ。第九章 “Harriet and Lovat at Sea in Marriage” にこれは現れる。作者 Lawrence は *Fantasia of the Unconscious* の中で論じた結婚の原理を繰り返すと共に、比喻を用いて、結婚は荒海の中を二人の漕ぎ手の各々が、自分勝手の方へ舵を向け様として、その指導権を争っている船の様なものだとしている。その船がここでは Harriet-Lovat 号なのである。この男女の対立は全篇を通じて現われている。

Somers が ‘a lord and master’ で Harriet がその服従すべき船員となる為には、「暗闇の神」を導き入れなければならない。

He did not yet submit to the fact which he *half* knew: that before mankind would accept any man for a king, and before Harriet would ever accept him, Richard Lovat, as a lord and master, he, this self-same Richard who was so strong on kingship, must open the doors of his soul and let in a dark Lord and Master for himself, the dark god he had sensed outside the door. Let him once truly submit to the dark majesty, break open his doors to this fearful god who is master, and enters us from below, the lower doors; let himself once admit a Master, the unspeakable god: and the rest would happen. (Chap. IX)

彼は自分が半分しか知らない事実に未だ服従しなかった。人類が如何なる男をも王として受け入れる前に、ハリエットが彼、リチャード・ロヴァットを支配者で且つ主人として受け入れる前に、彼即ち王権の上で大変に強いこの同一のリチャードは自分の魂のドアを開いて、ドアの外側で自分が感じていた暗闇の神である、暗闇の支配者で且つ主人を自ら、中に入れなければならない。彼を一度^{ひとたび}本当に暗闇の王に服従させよ。主人であり、また下方から、下部のドアから我々を中に入れる、この恐い^{ひとたび}神にドアを壊して開けよ。彼自身に一度、主人であり言葉で言い表わせない神を認めさせよ。そうすれば他のすべての事態は進むであろう。

ここに Lawrence は男性の優位を確立したのであった。一種のキリスト教否定、新しい神の創造というのは、Somers の精神の奥深い所にある性的本能の働きの現れである。Lawrence は彼を人間爆弾みたいな男 (“a kind of human bomb”) として描いている。(註8)

In *Kangaroo*, his Australian novel, Lawrence describes himself as “a kind of human bomb.” The figure is an accurate one; the bomb-like effect is the effect to which he aspires. Like his talismanic symbol of the Phoenix which rises to a new life from its ashes, Lawrence’s bomb image suggests the total annihilation of Christian civilization which is his condition for a new birth. And his instrument, both for this act of destruction and the act of re-creation, is the sexual mystery. It is in man’s sexual impulse, taken out of the mental consciousness and returned to the body and the blood where it belongs, that Lawrence finds the clue to salvation. Not the “sex in the head” of “advanced” people, of the modern theorists of sex; not the sensation of sex, which is what is sought in the decadence of civilization; not idealized sex, as it is allowed by the Christian religions; but sex as it is understood by primitive peoples, before the body has been “purified” and de-energized, civilized out of existence. According to Lawrence it is when man fulfills his sexual nature that he attains his highest human destiny, and achieves godhood.

彼のオーストラリアの小説、カンガルーに於いて、ロレンスは自分自身を「人間爆弾みたいな男」として描いている。その姿は的確なものである。爆弾の様な効果は彼が切望した効果である。自らの灰から新しい生命に甦えるフェニックスという彼の魔よけの象徴の様に、ロレンスの爆弾のイメージは新生に対する彼の条件であるキリスト教文化の全体的な絶滅を暗示するのである。そしてこの破壊行為と再生行為の双方の為の、彼の道具は性的神秘である。精神意識から引出され、それが属している肉体と血に戻る、人間の性衝動の中にこそ、ロレンスは救済に対する糸口を見つけるのである。「進んだ」人々や性の近代的理論家の「頭の中の性」ではなく、文化の退廃の中で求められるものである性のセンセーションでもなく、キリスト教によって許される様な理想的な性でもない。それは肉体が「純化され」、無気力化され、存在から文明化される前に、原始人によって理解された様な性である。ロレンスによれば、彼が彼の最も高い人間の運命に到達し、神性を達成するのは、人間が自らの性的本質を満たす時である。

(筆者訳)

この *Kangaroo* に於いて、具体的に表現された新社会の建設という政治への関心は、所詮 Lawrence の夢でしかなかった。創作の場で実験してみて、実現不可能な事を痛感した。彼は機械化し孤立してしまった現代社会の人間を、生命ある結合として結びつけ様とした。男女の完全なる性的関係を基礎として、男性同志の結合を計ったが、実際の政治の場になると、その結合が機械化してしまい、生命ある結合となり得なかったのだ。同胞愛とか同志愛なども、結局観念的なものでしか

なく、人間の理性という鑄型に豊かな生命を流し込み、枠にはめ、死んだ様に固く変形させられてしまうのである。考えがここまで来ると、Lawrence は人間的なものすべてが呪わしくなり、それから離脱したくなる。この追いつめられた状況に於いて、彼は暗闇の神に頼るのであった。それは彼にとって唯一の救いであり、それによって自分の孤独の自我を保っておく事が出来る。結合し様とすると、常にそこには機械的なものが入り込み、人間は生命を失ってしまうのだ。Kangaroo に於いて、Lawrence はこの様に絶望的状态に陥ってしまう。自分の自我を傷つけずには、生命ある人との結合は不可能であると、彼は悟った。自分の自我を傷つけずにおく事が出来るのは、暗闇の神に頼るしかない。そうすれば、政治への絶望からも救われ、Frieda に対する男の優位をも保てるのである。

この様に追い詰められた Somers であったが、この物語の最後の章では、オーストラリアの自然の美しさに魅せられて、人間関係のもつれを忘れてしまい、殆んどこの国を去り難い思いをするのである。この物語は旅行記的性格を持っていると前に述べたが、次のオーストラリアの春の寸描などは、Lawrence の自然美に対する感受性の豊かさをよく示している。

By the stream the mimosa was all gold, great gold bushes full of spring fire rising over your head, and the scent of the Australian spring, and the most ethereal of all golden bloom, the plummy, many-balled wattle, and the utter loneliness, the manlessness, the untouched blue sky overhead, the gaunt, lightless gum trees rearing a little way off, and sound of strange birds, vivid ones of strange, brilliant birds that flit round. Save for that, and for some weird frog-like sound, indescribable, the age-unbroken silence of the Australian bush.

But it is wonderful, out of the sombreness of gum trees, that seem the same, hoary for ever, and that are said to begin to wither from the centre the moment they are mature—out of the hollow bush of gum trees and silent heaths, all at once, in spring, the most delicate feathery yellow of plumes and plumes and plumes and trees and bushes of wattle, as if angels had flown right down out of the softest gold regions of heaven to settle here, in the Austrarian bush. And the perfume in all the air that might be heaven, and the unutterable stillness, save for strange bright birds and flocks of parrots, and the motionlessness, save for a stream and butterflies and some small brown bees. Yet a stillness, and a manlessness, and an elation, the bush flowering at the gates of heaven.

(Chap. XVIII)

流れのそばでミモザの花が金色に光っていた。春のきらめきで一杯の大きな金色の茂みは頭上をおおい、オーストラリアの春の香りが迎りにたちこめ、そしてそれはあらゆる金色の花の中で最も靈妙なものである。その羽毛状の多くの玉になったアカシアは全く孤立しており、迎りには人の気配もない。頭上には清い青空があり、無気味な輝きのないゴムの木がちょっと道はずれてそびえ立っている。そして見知らぬ鳥のさえずりや、迎りを軽ろやかに飛びまわっ

ている奇妙な光輝いている鳥の生き生きとしたさえずりが聞える。それを除いては、名状し難い異様な蛙の様な声を除いては、オーストラリアの茂みの何も破られた事のない静けさがあるだけだ。

だが永久に変わらず白く見え、成熟したとたん中心から枯れ始めると言われているゴムの木から離れた所は素晴らしい光景だ。——ゴムの木の空な茂みや静かなヒースから離れた所に、春になると突然にアカシアの幾重にも重なる羽毛や木々や茂みの最も繊細な羽根の様な黄色がはえる。丁度あたかも天使達がここオーストラリアの茂みに落ち着こうと、天の最もやさしい金色の場所から正に降りたって来たかの様に。天上ともまがう空中には芳香が漂よい、見知らぬ色のあざやかな鳥や、オオムの群れを除いては、言うに言われない静けさが漂っている。小川の流れや蝶々そして幾匹かの茶色の蜂を除いては動く気配などなかった。だが静けさや人気のなさや、意気揚々とした雰囲気があり、天の戸口の所で花咲く茂みがそこにあった。

旅人 Somers の様に、作者である Lawrence 自身も、「漂泊の詩人」と言ってよい程、また旅を続ける。オーストラリアから、1922年九月にアメリカに渡り、ニュー・メキシコのタオス (Taos) に赴き、一時ヨーロッパ及びメキシコへ数度旅をしたのを除くと、1925年九月迄そこに滞在したのは、前に述べた通りである。このメキシコ旅行は実り多きものであった。この期間に彼は *The Plumed Serpent* 及び *St. Mawr*, *The Princess*, *The Woman Who Rode Away* 等の短篇, *Mornings in Mexico*. の旅行記, その他の作品を書いた。そしてこれらは、メキシコに於いて、又はメキシコによってのみ、Lawrence というヨーロッパ的、余りにもイギリス的な作家が、創造出来た様な作品である。

Lawrence が *The Plumed Serpent* に筆を染めたのは、1923年五月の事で、Kiowa Ranch から Chapala 湖畔に居を移した後は筆が進み、約二ヶ月後の七月上旬頃には初稿が終りそうであった。^(註9) だが一旦放棄され、メキシコ・シティ (Mexico City) の小さな町ワハカ (Oaxaca) で完成する。

The Plumed Serpent には二つの筋があり、この二つが縦糸、横糸となり、縦横に織り合わされて物語を構成している。一つは、アイルランド生れの中年の婦人 Kate Leslie を中心とする筋である。Kate はアイルランドの自由と独立の為に戦った夫 Joachim と死別した未亡人で、子供二人を故国に残して、単身メキシコに渡って来る。メキシコに到着して程無く、この土地の名物である闘牛を見物した帰途、早春の驟雨のなかで、メキシコ軍人で身体の小さい Don Cipriano と、その宗教的・政治的指導者であり、スペイン人で身体の大きく、美しい Don Ramón に会い、様な啓示を受け、彼等の宗教運動の核心に触れる。知的で主我的な、孤立している西欧の女性である Kate は、初めて接する前キリスト教的・異教的な信仰と風習に、心の眼の鱗がとれた様な思いである。更に Kate は、カトリック信者で夫の宗教運動に賛成出来ずに、反対し続け半狂乱になって死んでしまう Don Ramón の妻 Doña Carlota や、その後妻でその宗教に帰依し実践の道に入る Teresa とも親しくする。

こういう人々は、各々独立した存在ではあるが、結果的には Kate の精神に強く影響を与え、徐々に変化、促進させてゆく小道具としての役目を果しているのである。又この様な事は、小説の背景であるメキシコの種々様々な光景にも言える。色に原色だけを使った様な風景、キラキラ光る太陽、厳しい暑さ、篠突く様な豪雨、無感動な生気のない眼差しをして、夢の中での様に、チョコレートをした水をたたえた湖畔をさまよい歩くメキシコ人なども、彼女の心に何らかの影響を与えている。そして最初、自己肯定と自己否定の両極間を、大きな振幅を描いて揺れていた振子とも言うべき彼女の心は、次第にその振幅を小さくしてゆき、やがて理想的境地でその揺れを止める事であろう。尤も、物語の結末では未だ揺れは残っており、完全に静止してはいないが。

これ以上論が進む前に、Kate について少し目を向けてみよう。彼女は誇り高き名門 Forrester 家に生まれ、世襲貴族は本質的に優れているというイギリス的な、ドイツ的な観念で育てられた。自分の血は普通一般の血と違って、ずっと優秀な別格なものだと教えられて来た。だがその平凡な生活に飽き足らず Joachim を知った後、夫と家庭を捨て彼のもとに奔った。彼女はアイルランドの自由と独立の為に闘うこの男を、女として愛し得る限り愛した。

Joachim Leslie, her dead husband, she had loved as much as a woman can love a man: that is, to the bounds of human love. Then she had realised that human love has its limits, that there is a beyond. And Joachim dead, willy-nilly her spirit had passed the bounds. She was no longer in love with love. She no longer yearned for the love of a man, or the love even of her children. Joachim had gone into eternity in death, and she had crossed with him into a certain eternity in life. There, the yearning for companionship and sympathy and human love had left her. Something infinitely intangible but infinitely blessed took its place: a peace that passes understanding.

(Chap. III)

亡くなった夫ジョウキム・レズリーを、かの女は凡そ女の愛しうる限りの愛をもって熱愛した。つまり、人間愛の極限まで愛したのだった。やがてかの女は人間の愛には限界があり、まだその奥があることを知った。そしてジョウキムが亡くなると、否応なしにかの女の精神はその極限を越えてしまった。もはや恋を恋しはしなかった。もはや男の愛を、いな子供の愛すら求めなかった。ジョウキムは死んで永遠の中へ去ってしまった、そしてかの女は生きながらかれとともにある永遠の中へと渡っていった。そこでは、友情とか同情とか人間愛とかにたいするあこがれはかの女から離れてしまった。その代り渺々として触知しがたい、しかも限りなく祝福された何ものかが生れたのだ、悟性を絶した平和が。(註10)

同時に西欧の知性や伝統に対する不信の憎悪から、「万象の中心にある微妙な、調和的な沈黙のなかに、自分の魂の開きつつある花だけと共にいる為に」メキシコに渡って来たのであった。これは Kate を Frieda の或るイメージと重ね合せはものである。Kate と Frieda を無条件に、同一視出来ないとしても、Frieda が Kate の文学的なモデルと言う事は出来る。だが Kate は、同じ

く Frieda の面影を持ってはいても、*Kangaroo* の Harriet とは違う。彼女は作者の手で、彼の好ましい形に大分作り変えられている。そして、Harriet は現在にある女性像で、Kate は在るべき姿なのである。

もう一つの筋は、Don Ramón と Don Cipriano の宗教運動を軸としたものである。この二人は社会主義やアメリカ主義、そして腐った因襲の為に、底知れぬ退廃と昏迷に陥っていた、この国を救おうと、古くから土着の人々の間に崇拜されていた神々——その主神が Quetzalcoatl^(註11)で、翼というより厳密に言えば、羽毛のある蛇の姿をしている——の信仰を復活させ様としているのである。Kate は閉塞した精神の袋小路から、自分を脱出させるひとつの鍵をその運動の中に探り当てる事が出来るかもしれないと期待して、二人に近付き多大な影響を受ける。ここで二つの筋は密接に結びつくのである。更に Ramón の二人の妻、即ち先妻の Carlota と、後妻 Teresa が Kate と親しく、しかも女性同志という事で二つの筋はより緊密になっている。

空の魂たる鷲と地の霊である蛇との神秘的結合、つまり Quetzalcoatl という、Ramón のこの新宗教を Doña Carlota は批判し、Teresa はそれに帰依し、その実践者となる。二人は対照的な道を進み、彼の新宗教の性格を明確に規定する事になる。

四十才の孤独な女 Kate は雨の中のめぐり会いで、Don Cipriano と知り合いになり、彼を通じて Don Ramón をも知った。その彼らが、政治が麻の如く乱れ、国家不安を起しているメキシコを救おうと、Quetzalcoatl を導びきの星とする集団を結集する。その宗教的・軍事的指導者が Don Ramón で、その幕僚的使徒が Don Cipriano である。そして Don Ramónこそが甦った Quetzalcoatl そのものであり、メキシコの救世主なのであった。彼は機械文明を厭い、西欧、アメリカ文明化されてゆくメキシコを救おうとしている。そして人民を救う道は人民と神との新しい真にダイナミックな結合にこそあると考える。*Kangaroo* で Somers が強く反撥した「愛の神」は、ここでは Somers が求め様とした「暗闇の神」に地位をゆずっている。

だが Kate は最初、その拭い難いヨーロッパ的意識によって、「空の奥から鷲の如く現われ、地の底から蛇の如く現われ」て、鷲=知性と蛇=肉体との結合によって全人性を回復しようとする Quetzalcoatl 運動と、これを指導し促進する人々に強く反撥を感じるが、同時に深く魅惑されずにはいられなかった。Kate は果してこの魅力から逃れられるであろうか？

さて、この物語に於いて、多くの批評家の不評を買う程^(註12)、不必要に新宗教 Quetzalcoatl 信仰が頻繁に出て来る理由というのは、Lawrence が「闇の思想」を読者に強調し強く訴えたいが為にある。それは、Quetzalcoatl を祭るのに夜の闇の中で篝火を焚き、その火の下で胸打つ太鼓の音と共に、青・赤・白の肩衣を着けた土人が踊る事でも事象されている。剩え、Kate はこの踊りに加わって、女はより偉大な女性、男はより偉大な男性の中へと融け込み、卑少な存在として自己は消滅してしまう様な気持がするのであった。

最早明白の様に Quetzalcoatl は「暗闇の神」である。そして Don Ramón と Don Cipriano の関係は、人間的な次元を越えた奥深い所で結び付き、「優者の思想」でつながっている。Kate が Don Cipriano に、貴方は Don Ramón を信じていないと言うと——

“How not believe? I not believe in Ramón?—Well, perhaps not, in that way of kneeling before him and spreading out my arms and shedding tears on his feet. But I—I believe in him, too. Not in your way, but in mine. I tell you why. Because he has the power to compel me. If he hadn't the power to *compel* me, how should I believe?”

“It is a queer sort of belief that is compelled,” she said.

“How else should one believe, except by being compelled? I like Ramón for that, that he can compel me. When I grew up, and my godfather could not compel me to believe, I was very unhappy. It made me very unhappy.—But Ramón *compels* me, and that is very good. It makes me very happy, when I know I can't escape.

(Chap. X III)

「どうして信じないことがありますしょう？ わたしがラモンを信じない？——なるほど、信じてないかもしれない、かれの前に跪いて両腕を拡げて足もとで涙を流したりしませんからね。だがわたしは——わたしだってかれを信じていますよ。あなた流にぢゃなく、わたし流に。なぜだかいいましょか。かれにはわたしを圧服する力があるからです。わたしを圧服する力がなかったら、どうして信じましょ？」

「圧服されて信じるなんて妙な信じかただこと、」ケイトはいった。

「圧服されて信じるほか、どうして信じようがあらう？ わたしを圧服する力があればこそ、かれが好きなんですよ、わたしは。わたしが大きくなって、名附親がわたしを無理に信仰させえなくなったとき、わたしはまったく不幸だった。実に不幸になってしまった。——だがラモンはわたしを圧服する、そこが有難いんです。逃れられないと知ったとき、お蔭でわたしはたいへん幸福になった。

また Don Ramón は Don Cipriano とは人間的次元を超えた奥深い所に於いて結ばれており、「互いに他の永遠不変の孤独を認め合った抱擁だ」と言う。この奥深い所というのは Don Ramón の言う、一人の男と一人の女または男が相寄って作られた魂、即ち「あかつきの星」(the Morning Star)の光のもとでの出会いの場所をいうのであらう。Don Ramón の独白の中にもそれがみえる。

The woman that was with me in the Morning Star, how glad I should be of her!
And the man that was with me there, what a delight his presence would be! Surely the Morning Star is a meeting-ground for us, for the joy! (Chap. X VII)

「暁の星のもとでわたしと共にある女を、わたしはどんなによろこぶことであらう！ そこでわたしと合する男があれば、どれほどその男がいてくれることはよろこびであらうか！ たしかに暁の星こそわれわれにとって、悦ばしい集合地なのである！

この関係は、「烈しく照りつける太陽」と「その後にある一層奥深いもう一つの暗黒の太陽」の

関係に象徴され、現実には死と破壊の神で、Quetzalcoatl の従神である Huitzilopochtli となる Don Cipriano と、主神 Quetzalcoatl となる Don Ramón との関係である。これが Lawrence の理想とする男性同志の結合である。

一方、暗闇の神の思想を通じて男性と女性との関係を、Don Ramón—Kate の関係で実現している。Don Cipriano=Lawrence に Kate=Frieda が結果的には服従する事になるのである。現実には飽く迄、Frieda は Lawrence に抵抗し続け、屈服する事がなかったので、彼は妻にこの物語の中で復讐を試みたのだと言われても仕方があるまい。

Kate は美しい肉体を持った Don Cipriano に求婚される。しかし彼女は余りにも西欧的思想に染まっているので、この原始的な血がその身体の中に流れ、暗く神秘的な男根的存在である彼に、逃れられない魅力を感じながらも、仲々結婚に踏み切れない。凶徒の卑劣な襲撃を受けて、重傷を負った Ramón を見舞いに二人がハミルテペク (Jamiltepec) へ車で行く時、Kate は Cipriano の事をこう感じる——

But within his own heavy, dark range he had a curious power. Almost she could see the black fume of power which he emitted, the dark, heavy vibration of his blood, which cast a spell over her.

As they sat side by side in the moter-car, silent, swaying to the broken road, she could feel the curious tingling heat of his blood, and the heavy power of the *will* that lay unemerged in his blood. She could see again the skies go dark, and the phallic mystery rearing itself like a whirling dark cloud, to the zenith, till it pierced the sombre, twilit zenith; the old, supreme phallic mystery. And herself in the everlasting twilight, a sky above where the sun ran smokily, an earth below where the trees and creatures rose up in blackness, and man strode along naked, dark, half-visible, and suddenly whirled in supreme power, towering like a dark whirlwind column, whirling to pierce the very zenith.

The mystery of the primeval world! She could feel it now in all its shadowy, furious magnificence. She knew now what was the black, gliniting look in Cipriano's eyes. She could understand marrying him now. (Chap. XX)

しかしながらその鈍な、暗澹とした振幅の内部に奇妙な力を蔵していた。かれが発散する力の黒い煙をケイトは見ることができるくらいだった。くらい、鈍重な血の振動、それがケイトにひとつの魔力を投げかけた。

ひどい道なのでさかんに揺られながら、黙って、自動車の中で肩を並べていると、ケイトはかれの血の奇妙な操つたいようなぬくみと、血の中に潜んでいる重々しい意志の力とを感じるのだった。またしても空が暗み、男根崇拜の神秘が渦巻く黒雲のように湧き上って天に押し、ついに幽暗薄明の天心を貫く様が見られるのだった。古い、類を絶した男根崇拜の神秘。ケイト自身は永遠の黄昏にあって、濛々と太陽の昇っていく空や、樹木や生物が黒々と捲きおこ

り、人間が裸かで、朦朧と、ほとんど眼に見えず潤歩する大地、突如すさまじい力に吹き上げられ、くらい旋風の柱のように聳え立ち、渦巻いて天心を貫こうとする。

原始世界の神秘よ！ いまこそケイトはそれの影深い、怒れる荘厳さをすべて感じとることができたのであった。シプリアーノの双眼に宿る黒い、きらきらしたまなざしの何物であるかを知ったのであった。いま、かれと結婚することの意味を解しえたのであった。

そして彼女は、彼との結婚を了解出来たのである。

Ah! and what a mystery of prone submission, on her part, this huge erection would imply! Submission absolute, like the earth under the sky. Beneath an over-arching absolute.

Ah! what a marriage! How terrible! and how complete! With the finality of death, and yet more than death. The arms of the twilit Pan. And the awful, half-intelligible voice from the cloud.

She could conceive now her marriage with Cipriano; the supreme passivity, like the earth below the twilight, consummate in living lifelessness, the sheer solid mystery of passivity. Ah, what an abandon, what an abandon, what an abandon!—of so many things she wanted to abandon. (Chap. XX)

ああ！ この巨大な屹立は、ケイトにとって何という屈伏の神秘を含むことであろう！ 大空の下なる大地に似た絶対の屈従。万象を蔽う絶対者の下に。

ああ！ 何たる結婚ぞ！ 怖ろしい！ そして完全だ！ 死のごとき究極性をもちながら、しかも死以上なのだ。薄明のパン神の双腕。雲間よりひびく畏るべく解しがたい声。

いまやケイトはシプリアーノとの結婚を了解することができた。至上の受動、薄明の下なる大地のごとく、完璧な生ける無生、類なくかたき受動の神秘さ。ああ、何たる放棄、何たる遺棄、何たる諦観！——何にもましてケイトは己を放棄したかった。

やっと彼女は Don Cipriano との結婚を決意する事となる。一旦は自己を屈服させる事のうちに彼女は自分が完全になったと思う。だが、強烈な自我を持つ彼女は尚もためらう。彼女は最後迄、自分の個性や自我意識に執着しようとする気持を捨て切れない。宇宙の根源的な神及び男性の支配以外のものは存在し得ず、女性は副次的存在、「ただ従属的な道具」に過ぎないという思想は彼女にとって耐え難い事であった。だがそういった思想を身を以て実行している Teresa を見て、Kate は怒りを覚えるが同時に羨しくもなる。彼女が Teresa に Don Ramón は Don Cipriano 以上に女性から服従を求める男だと言うと、Teresa から服従という意味を教えられる。それは、服従などという強い言葉で意識する事も出来ない程、静かなものとされる。

“How do you know that Ramón needs submission from a woman?” she said. “How do you know? He has not asked any submission from you.—And you are wrong. He

does not ask submission from me. He wants me to give myself gently to him. And then he gives himself back to me far more gently than I give myself to him. Because a man like that is more gentle than a woman. He is not like Cipriano. Cipriano is a soldier. But Ramón is gentle. You are mistaken in what you say.” (Chap. XXVII)

「ラモンが女から服従を求めるなんて、どうしておわかりになりました？ どうしてご存知でございます？ あのひと、あなたから何ひとつ服従なぞ求めはいたしませんでした。——ですから、あなたは考えちがいなすってらっしゃるんですわ。あたくしから服従なんて求めたことございませんもの。ただ、やさしくあたくしというものを委してくれと申すだけでございます。そして、あたくしがあのひとに捧げるよりももっとももっとやさしく自分をあたくしにくれますのです。だってああいうひとって、女よりもやさしいんですもの。シプリアーノさんとはちがいましてよ。シプリアーノさんは軍人でいらっしゃるから。でもラモンはやさしいひと。あなたの仰しゃること、お考えちがいですわ。」

この様に、自分の自我の固執と男性への服従の間を Kate の心は、往ったり来たりして揺れ動くが徐々に服従の方に傾いてゆく。彼女は Cipriano との触れ合いの中で、「生命力」であり「大きな性」であるものが働いて自分を包んでくれるのを知る。

After all, when Cipriano touched her caressively, all her body flowered. That was the greater sex, that could fill all the world with lustre, and which she dared not think about, its power was so much greater than her own will. (Chap. XXVII)

つまりはシプリアーノの愛撫を受けたればこそ、あたしの肉体も燎爛と花咲いたのだ。それはより大なる性であり、あまねく全世界に光明を放ちうる性であり、自分なぞの考えも及ばぬような光なのであって、その力は自分自身の意志よりもはるかに大きい。

そして Kate は自覚するのである。人間は自分の我儘な意志のままに生きてはならない。或る「限界」の中で生きてゆかなければならない。それ故、奴隷的な「屈服」でなく、自分が必要とする限りの「服従」を選んだのであった。

“I must have both,” she said to herself. “I must not recoil against Cipriano and Ramón, they make my blood blossom in my body. I say they are limited. If one tries to be unlimited, one becomes horrible. Without Cipriano to touch me and limit me and submerge my will, I shall become a horrible, elderly female. I ought to *want* to be limited. I ought to be *glad* if a man will limit me with a strong will and a warm touch. Because what I call my greatness, and the vastness of the Lord behind me, lets me fall through a hollow floor of nothingness, once there is no man’s hand there to hold me warm and limited. Ah yes! Rather than become elderly and a bit grisly, I will make my submission; as far as I need, and no farther.” (Chap. XXVII)

「あたしはこれを両方とももたなければいけない。」ケイトの独語はつづく。「あたしはシプリアーノやラモンに辟易してはならない、あのひとたちはあたしの肉体に花を咲かせてくれるのだ。なるほど、あのひとたちの力は限られている。だがそんなことをいえば誰だって力には限りがあるじゃないか。無限になろうなんかすれば、とんでもないものになってしまう。あたしに触れ、あたしを制限し、あたしの意志を溺らせてくれるシプリアーノがなければ、あたしは忌わしい中年すぎの女になってしまうだろう。あたしは制限されることを求めるべきだ。もし誰か男が強い意志とあたたかな接触をもってあたしを制限してくれるなら、あたしは感謝して然るべきだ。あたしが自分の偉大さと叫び、背後にある主の大きさと呼ぶところのものが、あたしを虚無のうつろな床に落したればこそ、かっていかなる男の手もあたしをあたためかつ制限してはくれなかったのだ。そうだと！ 中老になって、薄気味悪い猫姿になるくらいなら、むしろ屈服しよう、必要なかぎりにおいて、それ以上には出ないで。」

彼の男性対女性の関係が曲りなりに、この作品で実現されたが故に、後の批評家達が幾つかの作品の不備、欠点を指摘しようとも、Curtis Brown への手紙でこの作品の事を次の様に言っているのも、うなずけることである。

I consider this my most important novel, so far.^(註13)

これまでのと、私はこれを私の最も重要な小説と考えます。

Ⅳ 暗闇の神から「やさしさ」へ

アメリカを去り、故国イギリスに戻ったのが1925年九月の事であったが、イギリスには大して長い間留まらずにイタリアに渡った。この地で Lawrence は *Lady Chatterley's Lover*, 旅行記 *Etruscan Places*, 短篇 *The Man Who Died* 等その他を書いた。その項には最早 Lawrence も死を覚悟していたらしく、自分の健康状態も顧みずに多くの作品を手掛けたというのは、未だしたい事を多く残して死期を悟った者が生き急いだ結果とも思われたいことはない。

暗闇の神を探し求めて、見知らぬ異国を巡り歩いたが、結局見付ける事の出来なかった Lawrence は、段々に身体が衰弱してきて自分の思い通りに動けなくなったからか、暗闇の神の探求は止めにし、次第に人との接触到る種の繊細なやさしさ (tenderness) を強調する様になった^(註14)。彼は1926年十月に最後の長篇 *Lady Chatterley's Lover* の第一稿に着手し、改稿する事三度、漸く1928年一月に完成した。この様に、*The Plumed Serpent* から *Lady Chatterley's Lover* へ進むにつれ彼の思想も変化している。

Catherine Carswell へ、スカンディッチ (Scandicci) のミレンダ荘 (Villa Mirinda) から、1928年に出した手紙^(註15)で、Lawrence は今度フロレンスで私家版で出版する作品を、“I'll call it *Tenderness*—the novel.” (「私はそれをやさしさと呼ぼう。その小説を。’)と言っているが、それから約一ヶ月後の Dorothy Brett 宛の手紙^(註16)には、“But in Florence I want to do my private edition of *Lady Chatterley's Lover*.” (「だがフロレンスで私はチャタレー夫人の恋人の

私家版を出したいと思う。』という言葉が見られる。この事実から彼がこの作品を「やさしさ (tenderness)」の思想を具体化しようとしたことが分かる。

この作品の出版には彼は可成り苦勞しているのである。印刷を英語の分らない植字工しかいないフロレンスの印刷所に頼んだり、Martin Secker 社に出版することを拒否されたりするが、その度に彼は自分の作品の弁護を友人宛の手紙^(註17)とするのである。曰く、——

My novel, *Lady Chatterley's Lover, or John Thomas and Lady Jane*, is at the printer's in Florence: such a nice little printing shop all working away by hand——cosy and bit by bit, real Florentine manner——and the printer doesn't know a word of English——nobody on the place know a word——where ignorance is bliss! Where the serpent is invisible! They will print on a nice handmade Italian paper——should be an attractive book, I do hope I'll sell my 1000 copies——or most of 'em——or I'll be broke. I want to post them direct to purchasers. I shall send you a few little order-leaflets, and you will find me a few purchasers, won't you? I shan't send the book unless the people send the two quid, else I'm left.

I haven't heard from——. Maybe he's got a belly-ache. I can't help it. It's not my fault if people turn into withered sticks, with never a kick in them. I believe in the phallic consciousness, as against the irritable cerebral consciousness we're afflicted with: and anybody who calls my novel a dirty sexual novel is a liar. It's not even a sexual novel: it's a phallic. Sex is a thing that exists in the head, its reactions are cerebral, and its processes mental. Whereas the phallic reality is warm and spontaneous and——but *basta!* you've had enough.

僕の小説「チャタレー夫人の恋人」、または「ジョン・トマスとジェイン夫人」は、いまフロレンスで印刷している、何もかも手刷でやっている、ひどく気持のよい小さな印刷屋で——気持よく、少しずつ、真のフロレンス流にやっている——そして印刷屋は英語は一言も知らない——職工も誰ひとり英語を知っているものはないのだ——無知が祝福されているところだよ！そしてそこでは蛇は眼に見えない！きれいな、手漉きのイタリー紙に刷るのだ——必ず魅力ある本になるだろう。千部は売りたいものだ——或いはその大部分を——でないと僕は破産だ。買う人に直接送ろうと思う。注文書の小綴りを送るから、少し買手を見つけてくれないかね。二ポンド送ってくれなければ、本は送らない、そのほかではごめん。

——からは近ごろ手紙を貰わない。腹痛でも起したんだろう。仕方ないさ。ひとが萎れた棒みたいになって元気がなくなったって、僕のせいではないんだから。僕は、僕らが悩んでいる焦燥的な頭腦的自意識に反して、男根崇拜的意識を信ずるのだ。僕の小説が汚らしい性的な小説だという奴は、嘘吐きだ。それは性的小説なんていうものではないのだ、それは男根崇拜的なんだ。性^{セックス}なんて、頭の中に存在するもので、その反動は頭腦的で、その過程は精神的なものだ。ところが、男根崇拜の現実は、温く自発的のもので、——だが、もういい！もう沢山

だ。

また曰く――

It is strictly a novel of the phallic consciousness as against the mental consciousness of today. For some things, you will probably dislike it: because you are still squeamish, and scared of the phallic reality. It is perfectly wholesome and normal, and man and a woman. But I protest against its being labelled 'sex'. Sex is a mental reaction nowadays, and a hopelessly cerebral affair: and what I believe in is the true phallic consciousness.^(註18)

それは現代の精神的意識に反対した男根崇拜意識の小説だ。或る点で君は多分それを好まないだろう、と言うのは君はまだ潔癖で、男根崇拜的現実を恐れているからだ。それは完全に健全で正常だ、そして一人の男と一人の女の話だ。だが僕はそれが「セックス」だというレッテルを張られることに抗議する。セックスとは現在では精神的反動であり、絶望的に大脳の事柄である、そして僕の信ずるのは真の男根崇拜的意識なのだ。^(註19)

要するに彼の言う phallus 崇拜意識とは、文明社会に於いて一般的な、皮相的な、個人的な性の意識とは異なり、極めて奥の深い、或る意味での宗教的とも言える様なものと結合している性の意識を言うのであろう。

この作品に於いて性描写が多く出て来る事は、周知の事柄であり、Lawrence の故国イギリスや我国日本でも、猥褻の罪に問われた。そして結果的には被告側は、前者に於いては勝利を得、後者に於いては負北を喫したのであった。Lawrence はこの作品で phallus 崇拜意識を主題として説いたが故に、これ程に性描写をしたのである。また性描写の中にこそ、その主題を展開しざるを得ないが故に描写したのであり、好色的な意識の為に描写したのではないのである。「セックスと美とは火と焰の関係の如く、実は同一のものなのだ。セックスを嫌うことは即ち美を嫌うことである」^(註20) と言っている Lawrence は、「三色堇にことよせて」の中で自分が「わいせつな」な言葉を使うというので、官憲ににらたれたり、人に非難されたりするのは道理に合わない事だと言っている。

Myself, I am mystified at this horror over a mere word, a plain simple word that stands for a plain simple thing. "In the beginning was the Word, and the Word was God and the Word was with God." If that is true, then we are very far from the beginning. When did the Word "fall"? When did the Word become unclean "below the navel"? Because today, if you suggest that the word arse was in the beginning and was God and was with God, you will just be put in prison at once. Though a doctor might say the same of the word *ischial tuberosity*, and all the old ladies would piously murmur "Quite!" Now that sort of thing is idiotic and humiliating. Whoever the God

was that made us, He made us complete. He didn't stop at the navel and leave the rest to the devil. It is too childish. And the same with the Word which is God. If the Word is God—which in the sense of the human it is—then you can't suddenly say that all the words which belong below the navel are obscene: The word arse is as much god as the word face. It must be so, otherwise you cut off your god at the waist.

What is obvious is that the words in these cases have been dirtied by the mind, by unclean mental associations. The words themselves are clean, so are the things to which they apply. But the mind drags in a filthy association, calls up some repulsive emotion.^(註21)

わたし自身としては、わたしは単なる一つの言葉、単純素朴なことを指す単純素朴な言葉を使うことに人があんなに怖れを抱いていることが却って腑におちないのである。「はじめに言葉ありき、言葉は神と共にあり、言葉は神なりき」もしこれが本当ならば、われわれも「はじめ」からずいぶん遠く離れてしまったものだ。いつこの「言葉」は「墮落」したのだろうか？ いつ「言葉」は「臍の下では」不潔なものとされるようになったのであろうか？ 今日では、はじめに尻という言葉ありき、それは神にして神と共にあり、などと言い出そうものなら直ちに投獄されるにきまっている。ところが、医者と同じことを「坐骨突起」というような術語で言うのは差支えないことであり、老婦人方も「そうですわね！」などと恭々しく呟くことであろう。だがこんなふうなことは馬鹿げきっているし、不面目きわまる話である。われわれを造り給うた神が誰であるにしても、神はわれわれを完全なすがたに造り給うたのだ。神は臍のところへきてから、創造の御手をやめて、あとはどうともなれとばかり悪魔に委せるなんてことはなされなかった。それではあまりに大人げない話だ。神なる「言葉」にしても同じことだ。もし「言葉」が神であるならば——事実人間にとってはそうなのであるが——臍の下の部分を指す言葉はみんなわいせつだなどと突如として言い出すなんてできないはずだ。尻という言葉だって、顔という言葉と同じで、神であることにはかわりはない。そうでなければならぬはずである。でなかったら諸君は自分の尻を腰のところから切りとっているにちがいない。

容易に分ることは、この種の言葉は今日まで心によって穢され、不潔な心理的連想によって汚なくされてきてしまっているということである。言葉そのものは本来きれいなものであり、従ってまたその言葉が指し示す事物もきれいであるはずだ。ところが、心が穢らわしい連想をひきずりこみ、へどを吐きたいような感情を呼びおこすのだ。^(註22)

これらの事を頭に入れて、この作品を考察してみよう。

アメリカからイギリスに到着した Lawrence がその秋ダービシャーの工業地帯をドライブして、近代産業の醜悪さを痛感した事が、この作品を書く動機となったと言われる様に、この作品に現代産業文明に対する憎悪を彼はたたきつけている。

冒頭の言葉でこの長篇の調子がほぼ決ってしまっている。

O U R S is essentially a tragic age, so we refuse to take it tragically. The cataclysm has happened, we are among the ruins, we start to build up new little habitats, to have new little hopes. It is rather hard work: there is now no smooth road into the future: but we go round, or scramble over the obstacles. We've got to live, no matter how many skies have fallen. (Chap. I)

現代は本質的にひとつの悲劇的な時代である、だからわれわれは現代を悲劇的にとろうとはしたがるのだ。大変動が起こった、われわれは廢墟のただなかにあり、新しいささやかな住み家を建て、新しいささやかな希望を抱こうとしは始めている。それはかなり困難な仕事ではある。未来へのなだらかな道は今のところひとつもない。しかしわれわれは回り道をしたがり、障害物を這うようにして越えたりする。われわれは生きぬかねばならぬのだ、どんなに多くの空が落ちてこようとも。

こういう時代に住む人間は、機械としての社会に一つの歯車として組み込まれ、自らの自由意志を殆んど行使出来ずに生活している。金銭問題、社会政治問題には心を動かすが、自然と接触する事はなく、半分死人の様な生活をしており、心を通わず人間的な結合もなく、^{かね}金本位の機械的結合がまかり通っている。これが現代産業社会なのだ。Lawrence はこの機械主義を排し、人間の尊厳を取り戻し維持してゆく事を望んだ。人間の理想的な結合を一生求め続けて、Lawrence は色々な考え方をし、紆余曲折を経て“tenderness”の考えに到った。

この機械文明の権化として登場するのが、Constance (愛称 Connie) Chatterley の夫 Sir Clifford Chatterley である。彼は第一次世界大戦で負傷し、下半身不随となり性的無能者となり、性的満足感による生命感を味わう事が出来ない。この反動として、彼は小説家を志しやがて成功して相当の名声を獲得する様になる。だが、彼の作品は鋭い観察を持っているかもしれないが、観念だけでまとめ上げた小手先のものという観が強く、人の心を動かすものを持たないのである。肉体的な不具は、精神をも不具にしてしまったかの様だ。彼は身の囲りに知識人達を集め、空虚な「精神生活」に夢中になる。

Connie は最初 Clifford に実生活、精神生活などすべての面でよく仕え、尽す。だがそういう生活をしている Connie に向って、彼女の父 Sir Malcolm Ried は彼女を「環境につながれた demi-vierge」と呼ぶ。次第に Connie も、潤いのない、かさかさし切った空虚な生活に我慢出来なくなって、demi-vierge から脱したいと思う様になる。結果的には、この性的不満が他の男に Connie を奔らせる原因となるのである。

ここで Clifford の肉体的不具の為に、この様な行動に出る Connie は、例えどんなに心やさしいとしても、残酷な女と見られるのは避けられない。これについて作者 Lawrence の弁明に耳を傾けてみよう。

When I created Clifford and Connie, I had no idea what they were or why they were. They just came, pretty much as they are. But the novel was written, from start to

finish, three times. And when I read the first version, I recognized that the lameness of Clifford was symbolic of the paralysis, the deeper emotional or passionate paralysis, of most men of his sort and class today. I realized that it was perhaps taking an unfair advantage of Connie, to paralyse him technically. It made it so much more vulgar of her to leave him. Yet the story came as it did, by itself, so I left it alone. Whether we call it symbolism or not, it is, in the sense of its happening, inevitable.^(註23)

私がクリフォードとコニーを創り出した時、彼らがどういう者であり、何故存在するかなどという事は考えなかった。彼らはあるがままに登場して来たのだ。だがその小説は始めから終りまで三度書かれた。そして私が最初の版を読んだ時、クリフォードが今日の彼の様な階級の殆んどの者のまひ状態、深い情緒的、感情的まひ状態の象徴であると気が付いた。文字通りに彼をまひ状態にしておく事は恐らくコニーの不利になるだろうと気が付いた。その事で彼女が彼を棄ててゆくのが更に下劣になる。だが物語は自然に生れて来たものである。それだから私はそのままにしておいた。私達がそれを象徴と呼ぼうと呼ぶまいと、それは物語の展開に於いては避けられないのだ。

(筆者訳)

住む人と表裏一体となり、住人の性格を写し出している Clifford の邸内にも、機械的で冷やかな無感情な称序が幅をきかしている。すべてが冷静、清潔、正確で且つ整然とした称序を持っている。だが Connie には生命のあるものが持つ暖かみを、そこから感じる事が出来ない。あたかも自分が生命のない世界に入り込んでしまったかの様に思われて、次第次第に魂の空さを感じて来る。自分の肉体さえも、肌は荒れ艶が消え、豊かな曲線は崩れ、乳房は小さく張りがなくなっている^(註24)。肉体を否定し、精神のみを肯定する Clifford の思想のなした業である。Connie はもうこういう生活には我慢が出来ない。そして必然的に生命の焰を他の男に求める様になる。

最初に、Connie はそれを劇作家の Michaelis に求める。だが彼は Connie に満足を与える事は出来なかった。彼は Connie の理想とする男とは、非常にかけ離れた存在であった。希望を持つ事を拒否し孤独を必要とする反社会的な男である彼は、自分が女性と全く縁がない者であると考えている。彼の頭脳は「機智と怜れさ」を持っているのだが、観念的にしか社会現象や事物をとらえたり、対処したりする事が出来ない。だからこの観念が用をなさない肉体の関係に於いては、「奇妙な子供じみた頼りなさ」を露呈してしまい、完全な男性を求める Connie には満足を与えないのは当然である。要するに彼の肉体の愛は、女性と一緒に、女性をいたわりながら愛の極致に赴くというのではなく、自分だけの事しか考えず女性への肉体的思いやりなど考えないのである。それは愛の行為に於いて表わされている。

The physical desire he did not satisfy in her; he was always come and finished so quickly, then shrinking down on her breast and recovering somewhat his effrontery while she lay dazed, disappointed, lost.

(Chap. III)

女の肉欲を満足させることはなかった。つまり、いつも始まったかと思うとあっというまに

終ってしまい、女の胸のうえでしほみながら、女がぼうっとなり、がっかりし、途方にくれているあいだにどうにか例のずうずうしさをとりもどすのである。

こうではあっても、Michaelis が女性との恋愛を拒まないのは次の理由であった。

But occasional love, as a comfort and soothing, was also a good thing, and he was not ungrateful. On the contrary, he was burning, poignantly grateful for a piece of natural, spontaneous kindness: almost to tears. Beneath his pale, immobile, disillusioned face, his child's soul was sobbing with gratitude to the woman, and burning to come to her again; just as his outcast soul was knowing he would keep really clear of her.

(Chap. III)

しかしたまには恋愛も、こころを慰めしずめてくれるものとして、これもまたよいものであり、それをありがたくないと思っているわけではなかった。それどころか、自然な、自発的なやさしい思いをかけられると燃えるように、熱烈によるこび、ほとんど泣かんばかりだったのだ。その青白い、まゆひとつ動かさぬ、幻滅を感じているような顔の下で、子どものようなかれのたましいは女性にたいする感謝の念にすすり泣き、その女のもとへもどることを熱望していたのである。ちょうどかれの野良犬みたいなたましいがほんとうは女を避けているのだということを知っていたように。

この様に、Connie は自己の充足を求める為に、“a wild sort of compassion and yearning, and a wild, craving physical desire” (激しいほどの思いやりと思慕と、奔放な、強烈な肉欲) を積極的に求める様になり、そしてその時の二人は――

But then she soon learnt to hold him, to keep him there inside her when his crisis was over. And there he was generous and curiously potent; he stayed firm inside her, giving to her, while she was active……wildly, passionately active, coming to her own crisis. And as he felt the frenzy of her achieving her own orgasmic satisfaction from his hard, erect passivity, he had a curious sense of pride and satisfaction. (Chap. III)

だがそれからまもなくコニーは相手を持ちこたえさせ、相手の絶頂が過ぎてしまっても自分のなかで支えておくすべを知った。すると男はこせこせしなくなり奇妙に強くなった。女のなかでしっかりとし、女にまかせた、そのあいだに女のほうは積極的に……奔放に、熱烈に積極的になって、自分の絶頂に達するのだった。そして受け身になりながら固く、しっかりとしている男の体からコニー自身が逆上したようにオルガスムの満足をえたのを知ると、男は奇妙な誇りと満足感を覚えるのだった。

“Une immense espérance” (大いなる望み) の嫌いな Michaelis と希望を求める Connie との恋愛は、「喜びに満ちた快活さと興奮」に少しの間はつまれたとしても、「コニーは実際彼を全く理解していなかった」ので、やがてそういうものは失われる筈のものである運命にある。

And all the time she felt the reflection of his hopelessness in her. She couldn't quite, quite love in hopelessness. And he, being hopeless, couldn't ever quite love at all.

(Chap. III)

しかもその間ずっと相手の絶望感が自分のなかに反映してくるのを感じていた。絶望のうちに恋をすることはとても、どうしてもできなかった。そしてかれもまた、絶望していたので、恋をすることは全然できなかったのである。

ともあれ、肉体関係の行き着く先は結婚という問題である。Connie に結婚の申し込みをする時も、彼は自分の特徴をよく出して自らの与え得るものとして物質面の幸福を強調する。

'Every sort of good time, damn it, every sort! Dress, jewels up to a point, any night-club you like, know anybody you want to know, live the pace……travel and be somebody wherever you go……Darn it, every sort of good time.'

He spoke it almost in a brilliancy of triumph, and Connie looked at him as if dazzled, and really feeling nothing at all. Hardly even the surface of her mind was tickled at the glowing prospects he offered her. Hardly even her most outside self responded, that at any other time would have been thrilled.

(Chap. V)

「ありとあらゆる楽しい思いですよ、断然、ありとあらゆる！ 衣裳、手に入るかぎりの宝石、お好みのナイトクラブ、会いたい人間とはだれにでも会う、ぜいたく三昧な暮らし……旅行をしてゆくさきざきでちやほやされる……断然、ありとあらゆる楽しい思い」

はなばなしい勝利に酔ってでもいるようなしゃべりかたであった、そしてコニーはまぶしげに相手の顔を見てはいたが、実はなにひとつ感じていなかった。相手が語って聞かせたその輝かしい未来もコニーの精神の表面をさえ波立たせなかったのである。ほかの場合なら心を動かされたであろうに、コニーのいちばん外側の自我でさえほとんど応じることはなかったのである。

単なる快楽に基礎を置く空虚な結婚の未来を説明しても、そんなものにはもう飽き飽きしているConnieの心に訴えるわけがない。そして訴える当時者が、こんな風だったのにも大きな原因がある。

……and whether he was more anxious out of vanity for her to say Yes! or whether he was more panic-stricken for fear she *should* say Yes! - who can tell? (Chap. V)

しかしかれが見えからコニーに「はい！」といってもらいたがっているのか、それとも案外コニーが「はい！」というのではなからうかとそれ以上にびくびくしているのかどうか——それがだれにわかろう？

この彼のエゴイズムは、更に二人の肉体交渉に於いても表わされている。彼は自分だけ先に満足

してしまうのである。

Connie found it impossible to come to her crisis before he had really finished his. And he roused a certain craving passion in her, with his little boy's nakedness and softness; she had to go on after he had finished, in the wild tumult and heaving of her loins, while he heroically kept himself up, and present in her, with all his will and self-offering, till she brought about her own crisis, with weird little cries. (Chap. V)

かれがほんとうに絶頂に達してしまうまでコニーは自分が絶頂に達するわけにはいかないことはわかっていた。しかもかれは、その小さな少年のようなやわらかい裸体でもって、コニーのなかにある渴望するような情熱をかきたてたのである。相手が終わってしまったから、コニーは狂ったようにとり乱し、腰をあげたまま、つづけずにはいられなかった、そうしてコニーが、無気味なちいさな叫び声をあげて、やっと自分で絶頂に達するまで、相手は意志と献身のすべてをもって、雄々しくもちこたえ、女のなかにいた。

すぐその後、彼は残酷にも次の様に言い放つ。

'You couldn't go off at the same time as a man, could you? You'd have to bring yourself off! You'd have to run the show!' (Chap. V)

「男と同時に終ることができないんです、ね？ 自分でその気になってくれなくちゃあ！
そういうふりをしてくれなくちゃあ！」

ここには最早、思いやりとか真の愛情とかは全くなく、ただ残忍さのみがあるだけだ。当然この事は Connie にとっては、“one of the shocks of her life” であった。この言葉に、彼に対する一種の愛情で燃えている時肝をつぶしてしまう。

This speech was one of the crucial blows of Connie's life. It killed something in her.……Her whole sexual feeling for him, or for any man, collapsed that night. Her life fell apart from his as completely as if he had never existed. (Chap. V)

この一言はコニーの生涯の決定的な打撃のひとつであった。それはコニーのなかのなにかを殺してしまったのである。(中略)かれにたいして、もしくは男性というものにたいして、コニーの抱いていた性の感情はすべて、その夜くずれてしまったのである。自分の人生がかれという人間が初めから存在していなかったかのようにかれの人生からすっかり離れてしまったのである。

この Michaelis の一撃は、Connie がこれ迄誰からも攻め落される事がないと信じていた、あの「完全な女性の自由」；若い時に外国で満喫し享受し全く自分のものとしていた「自由」に、深く打こまれたのであった。これは Lawrence が説いて来た恋人同志が相手の快樂の為に自分を単なる道具に低下させ、又女性の方は更に完全な支配力を以て束縛するという、純粋に感動的な関係

の否定という事に大きな打撃を与えている点でも、重大な事である。これで Connie と Michaelis との仲は壊滅状態になり、彼女は “To accept the nothingness of life seemed to be the one of living.” (人生のこの大きな虚無を認めることが生きることのひとつの目的であるような気がした。) といった風になってしまう。

虚無感に陥ってしまった Connie が、次に相会したのは森番の Mellors であった。或る日 Connie は Mellors の小屋に Clifford のことずてをする為に出掛けて行く。そこで思い掛けずに、彼が半裸になって身体を洗っているところを見てしまい、我にもなくショックを受ける。

So she went round the side of the house. At the back of the cottage the land rose steeply, so the back yard was sunken, and enclosed by a low stone wall. She turned the corner of the house and stopped. In the little yard two paces beyond her, the man was washing himself, utterly unaware. He was naked to the hips, his velveteen breeches slipped down over his slender loins. And his white slim back was curved over a big bowl of soapy water, in which he ducked his head, shaking his head with a queer, quick little motion, lifting his slender white arms, and pressing the soapy water from his ears, quick, subtle as a weasel playing with water, and utterly alone. Connie backed away round the corner of the house, and hurried away to the wood. In spite of herself, she had had a shock. After all, merely a man washing himself; commonplace enough. Heaven knows!

Yet in some curious way it was a visionary experience: it had hit her in the middle of the body. She saw the clumsy breeches slipping down over the pure, delicate, white loins, the bones showing a little, and the sense of aloneness, of a creature purely alone, overwhelmed her. Perfect, white, solitary nudity of a creature that lives alone, and inwardly alone. And beyond that, a certain beauty of a pure creature. Not the stuff of beauty, not even the body of beauty, but a lambency, the warm, white flame of a single life, revealing itself in contours that one might touch: a body!

Connie had received the shock of vision in her womb, and she knew it; it lay inside her. (Chap. VI)

そのささやかな庭の一、二歩さきで、森番が体を洗っていたのである。すこしも気づかずに。腰まで裸になり、びろうどのズボンがほっそりとした腰からずり落ちていた。そして白いすんなりとした背をまげて石鹸のあわだらけの水を入れた大きなたらいのうえにかがみこみ、そのなかえ頭をつっこんで、奇妙な、きびきびした動作で頭を振り振り、ほっそりとした白い腕をあげて、耳から石鹸だらけの水をふきとっていたが、いたちが水とたわむれているようにすばやく、器用で、そしてまったく孤独な感じだった。コニーは家の角から身をひくと、いそいで森のなかへはいった。われにもなく、ショックをうけたのだった。とはいっても、男が体を洗っていただけのことだ。どこにでもあることだ、あれくらいのことなら!

しかもなにか奇妙なふうにはまぼろしのような経験であった。体のまんなかに一撃をくらったような気がした。純潔な、繊細な、白い腰からずり落ちそうになっているぶかっこうなズボン、ちらりと見えているあばら骨を目にしたのだったが、純潔にひとりで生きている人間の、あの孤独感に圧倒されたのである。孤独に、孤独な精神に生きている人間の完璧な、白い、ひとりぼっちの裸身。そしてそれ以上に、純潔な人間のもっているある種の美しさ。美の素材ではなく、美の実体ですらなく、ほのぼのとしたもの、手で触れるような輪郭のなかに現われる、ひとつの生命のはげしい、白い炎、ひとつの肉体！

コニーはこのまぼろしのショックを子宮にうけたのだった、そして自分にもそれがわかった。それは体の内部に宿ったのである。

コニーの子宮に宿ったものは、彼女の今迄経験、即ち Michaelis から受けた大打撃、Clifford との生活が原因となった彼女の枯渇した魂、生命感を感じられずに過ぎて来たこれ迄の生活、こういったものと強烈な対照をなし、更に強化される。

この時の出会で、もう二人の間に後の恋愛関係の萌芽とも言うべきものが現れている。Connie は彼の眼の中に暖い親切な心を見たし、Mellors は彼女の事を、「いい人だ。それにまた本当の女だ！」と考えている。

あの Michaelis との恋愛事件でのショックや、Clifford との生活に対する不満などで、病気になってしまった Connie は、Clifford の身のまわりの世話を Mrs Bolton にまかせ自由の身になる。彼女は「唯一の避難所で聖堂である」森を散歩するのが日課になり、森の中に Mellors が世話をしている雉子の飼育所を見つけ出す。そこに彼女は慰めを見出し、よくやって来る。Mellors は最初それをわずらわしく思う。彼は要するに階級を喪失した人間で、将校に迄なった事があり、教育はあるが金銭中心の文明を嫌悪し、文明から逃れて森番となり、外界から離れた孤独の生活をしてきた。彼は人間と接触するわずらわしさの為、初めのうち彼女を追い返えそうとする。だが潜在的には最早恋愛関係に入っている二人は、或る春の日に突然結ばれる。卵からかえった雉子の雛の説明を Mellors がしながら Connie にその一羽を渡す。

‘There!’ he said, holding out his hand to her. She took the little drab thing between her hands, and there it stood, on its impossible little stalks of legs, its atom of balancing life trembling through its almost weightless feet into Connie’s hands. But it lifted its handsome, clean-shaped little head boldly, and looked sharply round, and gave a little ‘peep’. ‘So adorable! So cheeky!’ she said softly.

The keeper, squatting beside her, was also watching with an amused face the bold little bird in her hands. Suddenly he saw a tear fall on to her wrist. (Chap. X)

「さあ！」そうやって、森番は片手をコニーのほうにさしのべた。コニーはその小さな黄褐色のひなを両手でうけとった、するとひよこはその手のひらに、もうこれ以上ほそい脚はあるまいと思えるようなわらしべみたいな脚で立ったが、そのほとんど重さというものを感じさせ

ない脚を通して平衡を保とうとする生命を有する原子の震えがコニーの手につたわってきた。しかしそのひよこは美しい、かっこうのよい小さな頭を大胆にもたげて、油断なくあたりを見まわすと、小さく「びいっ」と鳴いた。「まあかわいいこと！　なんておしゃまなんでしょう！」コニーはやさしくいった。

そばにしゃがんでいた森番も目をほそくして、コニーの手のなかのその大胆なひなをじっと見ていた。突然かれは涙が一滴コニーの手首に落ちるのを見た。

「自分の世代の孤独に苦しみながら、身も世もなく」泣いている Connie を見て、 Mellors は「永久に消えてくれればいいと望んでいた昔の炎」に突き動かされる。彼には、Connie が「待ちうけている」女に見え、小屋に連れて行く。ここで愛の営みがされる。

その営みが終わった時、Connie は自分の上にかぶさっていた大きな雲が取りのけられ、安らかさが与えられたのを知った。それは今迄彼女の知っていた精神的恋愛とか頭の中で理解した恋を棄てたからであったのだが、Connie には未だ顕在意識の上ではこの事が分っていていから、“Her tormented modern-woman’s brain still had no rest.”（彼女の悩める現代の友性としての頭脳はまだ安らぎをえられなかった。）のである。これは Michaelis との恋愛と著しい相異を示している。Michaelis との場合は、頭の中での恋愛であったのだが、今度は無意識の深い所から人間を動かしている、男に対する女、子に対する母という本源の力に身を任せる恋愛であるのだ。

Mellors は Connie と関係した後、忌み嫌って接触するのを避けていた産業文明というものに、彼女と共に再び対決しようとする。彼はこの肉体関係のことをこう言う――

‘It’s life,’ he said. ‘There’s no keeping clear. And if you do keep clear you might almost as well die. So if I’ve got to be broken open again, I have.’

She did not quite see it that way, but still……

‘It’s just love,’ she said cheerfully. (Chap. X)

「生活なんです。きれいさっぱり手をきるってわけにいかないんですね。すっぱり手をきりちまえば死んでも同じになってしまう。だからもしまた切りひらかねばならないというのなら、やりますよ、ぼくは」

コニーはあのことをそんなふうにはほんとうは考えていなかったが、それでも……

「これは恋愛そのものですわ」晴れやかにコニーはいった。

この二人の関係は例え Connie が“Love”と言おうとも、Mellors には厳として“Life”であり、この“Life”を通じて彼は産業文明に対抗しようとする。彼は人間相互の肉体的認識と優しい接触を守りながら、彼女を伴侶とし後盾として、金銭・機械・無覚な観念的世界と戦おうとする。だがやさしさが少しでも欠けると、調和を保っていた肉体関係でも崩れ出して、滑稽に見えてきて感動も湧かない。

That thrust of the buttocks, surely it was a little ridiculous. If you were a woman,

and a part in all the business, surely that thrusting of the man's buttocks was supremely ridiculous. Surely the man was intensely ridiculous in this posture and this act!

But she lay still, without recoil. Even when he had finished. She did not rouse herself to get a grip on her own satisfaction, as she had done with Michaelis; she lay still, and the tears slowly filled and ran from her eyes. (Chap. X)

あのしりの動きは、確かにそれはいささかこっけいだった。もし女の身になって、この所作に一役買っているとしたら、確かにあの男のしりの動きはたまらないほどこっけいだったであろう。確かにこの姿勢とこの動作のときの男というものはひどくこっけいだった。

しかし女はじっとしていた、たじろがずに。男が終わってしまったときでさえ、マイクリスの場合みたいに、自分の満足をもぎとろうとして体を動かすようなまねはしなかった。じっとしていた、すると涙がゆるやかに満ちて目から溢れた。

それで Connie は彼の事を、“Stranger! Stranger!” と考えてしまう。

もう一度、こういう惨めな状態になる事がある。Connie が Mellors に父や姉とヴェニスへ旅行すると告げた時、彼は彼女に子供をつくる為に利用されていたと怒る。彼女はそれに不安になる。その時の営みも惨めなものになる。

……she lay with her hands inert on his striving body and, do what she might, her spirit seemed to look on from the top of her head, and the butting of his haunches seemed ridiculous to her, and the sort of anxiety of his penis to come to its little evacuating crisis seemed farcical. (Chap. XII)

自分の手を男のはげしく動く体にだらりとのせていた、そして自分がどんなことをしようと、こころは頭のとっぺんから見おろしているようであり、男の体の動きはこっけいな気がするし、また、ちいさくしぼんでいく極点に達しようとするときの、一種の不安も茶番じみている。

Connie はこの時に、愛の営みに神聖な気持で接し得ないのである。上の文章の後、すぐ次の文章が続く。

Yes, this was love, this ridiculous bouncing of the buttocks, and the wilting of the poor, insignificant, moist little penis. This was the divine love! After all the moderns were right when they felt contempt for the performance; for it was a performance. It was quite true, as some poets said, that the God who created man must have had a sinister sense of humour, creating him a reasonable being, yet forcing him to take this ridiculous posture, and driving him with blind craving for this ridiculous performance.

(Chap. XII)

そうだ、これが恋愛というものなのだ、このこっけいな体のはずみと、貧弱な、つまらない、

しめったちいさななしぼみというものが。これこそがあの神々しい恋愛というものだとはいけなく、現代人がこの演技に軽蔑の念をいだくのも当然のことである。というのは、それはひとつの演技なのだから。あの詩人がいったように、人間を造った神というのは、人間を理性的な存在に創造しながら、しかも人間にこのこっけいな姿勢をとらせ、このこっけいな演技を盲目的に渴望するようにしたところに、ある無気味なユーモア感をもっていたにちがいない、というのはまったくそのとおりなのだ。

彼女は絶望的な気持になり、激しく泣き出す。

She wept bitterly, sobbing. 'But I want to love you, and I can't. It only seems horrid'.
(Chap. XII)

むせびながら、女は涙にくれた。「あなたを愛したいのに、それができないのです。それがとてもこわい気がして」

そして彼にすがりつく——

'Don't! Don't go! Don't leave me! Don't be cross with me! Hold me! Hold me fast!' she whispered in blind frenzy, not even knowing what she said, and clinging to him with uncanny force. It was from herself she wanted to be saved, from her own inward anger and resistance. Yet how powerful was that inward resistance that possessed her!

He took her in his arms again and drew her to him, and suddenly she became small in his arms, small and nestling. It was gone, the resistance was gone, and she began to melt in a marvellous peace.
(Chap. XII)

「だめ！ いってほだめ！ あたしをおいていってほだめ！ あたしにつらくあたらないで！ 抱いて！ しっかり抱いて！」自分でなにをいっているのかそれさえわからずに、女は盲目的な狂おしさでささやくと、はげしい力で男にしがみついた。救われたかったのだ、自分自身から、自分の心のなかの怒りと抵抗とから。しかも女にとりついたその心の抵抗はなんと強力なものだったことか！

男はまた両腕に女を抱いてひきよせた、すると突然女は男の腕のなかで小さくなった、小さくなりおちついた。それはなくなった、抵抗はなくなってしまった、そして女は驚くべき平和のなかで融けはじめた。

こうして心の内部の抵抗を取り去り、円満な交りの喜びを味わう事が出来る。

即ち Lawrence はここで男女間に於いて、女性が自分の自我を主張する時は悲しみを感じ、自我を滅却すれば喜びを得る事が出来ると言っているのである。この喜びの極致では人間は原始の生物としての生命に戻り、産業文明に閉込められた自己を真の生命に連れ戻す事が出来るのである。その極致で達する意識は——

Her whole self quivered unconscious and alive, like plasm. She could not know what it was. She could not remember what it had been. Only that it had been more lovely than anything ever could be. Only that. And afterwards she was utterly still, utterly unknowing, she was not aware for how long. (Chap. XII)

女の全身は無意識にそして生き生きと震えた、原形質のように。それがなにであるか女にはわからなかった。それがなにであったかとも思い出せなかった。ただそれほど美しいものなどほかにありえないということだけを思い出した。ただそれだけを。そしてすんでからはまったくしずかに、まったく無意識に、どれだけの時間が経ったかもわからなかった。

こうして Connie は性交渉に於いて、真の喜びを体験しつつ、今迄味った事のない温かさ、人間らしさ、やさしさを見出す事の出来る様になる。このやさしさというのは Mellors の信念でもある。Connie が彼の事を女性も何も信じる事の出来ない人と言うと――

‘Yes, I do believe in something. I believe in being warm-hearted. I believe especially in being warm-hearted in love, in fucking with a warm heart. I believe if men could fuck with warm hearts, and the women take it warm-heartedly, everything would come all right. It’s all this cold-hearted fucking that is death and idiocy’. (Chap. XIV)

「いや、なにかを信じている。こころがあたたかいということ信じている。とりわけ恋をしているあたたかいところというものを、あたたかいところでもって交わるということ信じているのだ。もし、男があたたかいところでもってあのことができ、女のほうもそれをあたたかいところでうけいれることができれば、万事うまくいくと信じている。みんなこのつめたいところで交わるからこそ、死人や白痴になってしまうんだ」

この言葉がこの小説の中心主題をはっきりと表わしている。もうここには以前に Lawrence の説いた男性の優位の主張や優者の神秘による指導者への服従といった力の関係は姿を消す。男女双方が優しさをもって結びあう事が大切だという。そして女ばかりでなく男も自我意識を押しつける事は許されない。Mellors は Connie に言う。

When a woman gets absolutely possessed by her own will, her own will set against everything, then it’s fearful, and she should be shot at last.’

‘And shouldn’t men be shot at last, if they get possessed by their own will?’

Ay! - the same!

(Chap. XVIII)

女が我意に、あらゆるものにたてつこうとする我意に、とことんまでとりつかれると、恐るべきものとなる、そうなったら結局は撃ち殺されるべきだよ」

「男だって結局は撃ち殺すほかないわけなの、我意にとりつかれたら？」

「あい！ ——同じことさ！」

最早男性の優位だけの主張などはここにはない。Lawrence はエゴイズムから脱する事が出来たと言ってもいいであろう。

この頃になると Lawrence は病が相当に重くなり、Frieda に向っても強く自我を主張する気力は殆んどなく、ただひたすらに人との結合という事を願っていた。そこで、彼は真の結合とは人と人との間にあるやさしさによってのみ実現出来るとした。Mellors はここで Lawrence の主張の代弁をしているのである。

一方、Clifford はと言えば、Connie の病気の為、卑しい女であるが情味に富んだ Mrs Bolton に身のまわりの世話をさせる事になった。親切でやさしい Mrs Bolton の影響と Connie が自分の身近かにいなくなってしまう為に、創作活動から手を引く様になる。そして今迄然程関心の無かった、親から受け継いでいた炭坑事業に心を移し専念する。持ち前の明晰な頭脳を駆使して、素晴らしい成績を上げ事業を発展させる。

即ち Clifford は *Women in Love* の Gerald Crich の別の姿とも言える。結局 Gerald と同じ様に生命を破壊してしまう運命であった^(註25)。Connie と心の離れてしまった Clifford は他に頼る人もないので、Mrs Bolton と更に一層親密になる。彼はこの事業を発展させるのに異常な興味を示し夢中になる。すべての権力を我身一身に集め様と色々な怒力をして或る程度成功するが、心の中は益々殺伐となり、狭量な度量のない人間となってゆく。これは Connie が Mellors と人間的な結び付きを見出し、幸福になったのと正反対である。最後には心の柱ともしていた Connie にも去られてしまうのである。

物語は急速に結末に進む。Mellors と Connie の実り豊かな結合を象徴するかの様に、彼女は彼の子供を宿す。前にも述べた通り、彼女は自分達の間隔をはっきりさせる為にヴェニスへ行く。この間に Mellors の妻 Bertha Coutts が現われ、ごたごたを起し厄介な事になる。二人は暫くの間離れて、事態の成り行きを見守る事になるところでこの小説は終りになっている。

これ程、率直にまた執拗な迄に Lawrence が性描写を丹念にしたのは、既述の如く両性関係についての彼の思想が男女の性行為の叙述の部分に於いて語られているからだ。更に彼はそこでタブーとされている語に対して反抗をしているといえよう。彼が言うにはタブーとされている語は、長い年月にわたる愚かしい習慣に過ぎず、我々はそれから脱け出すべきだ。そしてこの様な言葉^(註26)を秘密として隠す事の方が間違っている。それを隠し避けるふりをするところにポルノグラフィが生れる。ポルノグラフィはセックスを侮辱し、それを醜悪化し様とする試みで、自分の小説は好色本とは違っていると彼は述べている。彼は性を罪悪視したり侮辱したりするのはとんでもないと述べる。実際彼は性の関係を通じて行き詰った近代の自我意識を打開しようとしているのである。作者 Lawrence の求めるのは、漁色ではない。貞潔なのである。小説の結末の所で Mellors はその手紙の中で、Lawrence の言葉を代弁している。

So I love chastity now, because it is the peace that comes of fucking. I love being chaste now. I love it as snowdrops love the snow. I love this chastity, which is the pause of peace of our fucking, between us now like a snowdrop of forked white fire.

And when the real spring comes, when the drawing together comes, then we can fuck the little flame brilliant and yellow, brilliant. But not now, not yet! Now is the time to be chaste, it is so good to be chaste, like a river of cool water in my soul. I love the chastity now that it flows between us. It is like fresh water and rain.(Chap. XIX)

こうして今ぼくは貞潔を愛している、それが交わりによって生まれた平和というものなのだから。今ぼくは貞潔であることを愛している。ゆきのはなが雪を愛するようにそれを愛している。ぼくの愛しているこの貞潔、それは二叉の白い炎のゆきのはなに似た今のぼくらのあいだにある、ぼくらの交わりの平和な休止なのだ。そしてほんとうの春がめぐってきたとき、寄りそうときが訪れたとき、そのときこそぼくらは交わってこのささやかな炎をさんぜんと黄金色に、さんぜんと燃えあがらせることができるのだ。だが今じゃない、まだそのときではない！今は貞潔であるべきときであり、そして貞潔であるのはなんとすばらしいことか、ぼくのたましいのなかを流れる清冽な水の流れのように。ぼくらのあいだに流れているこの貞潔を今ぼくは愛するのだ。それは新鮮な水か雨に似ている。

これが Lawrence の最後の長篇小説であり、文字通り彼の白鳥の歌であった。今迄考え出したありとあらゆる人間的な結びつきも、すべて失敗に帰し絶望的な気持ちでいた Lawrence の最後の抵抗であった。人はすべて物質的なものに満足するか、貪欲な機械の下に踏みじられ、共に立って闘ってくれる者がいない。絶望状態の Lawrence は自分の思想にすがりつく他はなかった。これが自分の死後迄も生き長らえる事が出来るかもしれないからだ。

註

註 1) 口語訳 旧約新約聖書 ドン・ボスコ社 pp.266—267

註 2) 聖書, op. cit., p.115

註 3) Graham Hough, *The Dark Sun*. London : Duckworth, 1956. p.96

註 4) Hany T. Moore, *The Life and Works of D. H. Lawrence*. London : Unwin Books, 1963. p.153

註 5) 十一谷義三郎・崎山正毅訳, 「アーロンの杖」三笠書房。1973 (ロレンス全集・第七巻) 「アーロンの杖」の項の本文の出典の訳は以後上の両氏による。

註 6) Graham Hough, op. cit., p.99

註 7) 「カンガルー」の項の本文の出典の訳はこれ以後全て筆者による。

註 8) *The Portable D. H. Lawrence*, Edited and with an introduction by Diana Trilling. N. Y. : Viking Press, 1977. p.7

註 9) Richard Aldington, *D.H. Lawrence Portrait of a Genius But……*. New York : Collier Books, 1967. p.261

The Plumed Serpent must have been started early in May 1923, for there is a jotting by Lawrence giving the 2nd May as the date when he and Frieda moved into the house by Lake Chapala. By mid-May he was already well advanced, and expecting to finish the first draft by

the end of June or beginning of July. He worked at the book, as he always did when possible, out-of-doors, "sitting by the lake under a pepper-tree." He broke off to take a two-day expedition up the lake, during which they found a "possible" house for a permanent residence, but did not take it because of the new revolutions which were expected, and "why should one work to build a place and make it nice, only to have it destroyed?"

翼ある蛇は1923年五月初旬に書き始められたのに相異なる。というのは彼とフリーダがチャパラル湖畔の家に移った日付を、五月二日と記しているロレンスのメモがあるからだ。五月中旬迄には既によく進んでおり、初稿を六月終りか七月初め迄に仕上げるつもりでいた。出来る時は何時でもした様に戸外で、「湖畔のモクレンの木の下に座りながら」その本を書いた。彼は仕事を中断してその湖を二日間見てまわった。その間彼らは永住する場所として「まあまあの」家を見つけた。だがそれを借りなかった。というのは新しい革命が起りそうであったからだ。「壊されてしまうだけなのに家を建て、住み心地を良くする為に努力する必要など何処にあるのか？」
(筆者訳)

註10) 西村孝次訳「翼ある蛇」小山書店 1950「翼ある蛇」の項の出典の訳は以後西村氏による。

註11) *The Plumed Serpent*. London : Heinemann, 1970. p. 53

Quetzal is the name of a bird that lives high up in the mists of tropical mountains, and has very beautiful tail-feathers, precious to the Aztecs. Coatl is a serpent. Quetzalcoatl is the Plumed Serpent, so hideous in the fanged, feathered, writhing stone of the National Museum.

But Quetzalcoatl was, she vaguely remembered, a sort of fair-faced bearded god; the wind, the breath of life, the eyes that see and are unseen, like the stars by day. The eyes that watch behind the wind, as the stars beyond the blue of day.

ケツァルとは遙か熱帯の高山の霞の中に棲んで、アステカ族の崇拜する極めて美しい尾羽をもった鳥の名である。コアトルとは蛇のことだ。だからケツァルコアトルとは『翼ある蛇』の謂であって、国立博物館にはその毒牙と羽とをつけた、のたうっている凄惨な像を彫った石が陳列されている。

しかしケイトは漠然と思い出した、ケツァルコアトルは白哲有髯の神の一種だということを、生命の風であり呼吸であり、日中の星のごとく、他を見るが他から見られることのない眼だということを。風の背後にあって見成る眼だ、日の青空のかなたにある星のような。

註12) Hough, op. cit. p. 137

And the failure is almost complete. The hymns are formally abominable; the prose virtues of intelligence are in abeyance, and the loose rhythm is never strong enough to turn them into poetry. The imagery is false: it is meant to suggest the embodiment of deep inarticulate instincts in symbolic form; what actually happens is the reverse—the deliberate translation of a few quite conscious ideas about sex and power into superficial and carelessly chosen images.

そしてその失敗は殆んど完全なものなのだ。その賛美歌は儀式ばってひどいものである。知性の平凡な価値は停止しており、しまりのないリズムはそれらを詩にする程強くない。その心像は誤りで、象徴の形で深い表現されない直観の具体化を暗示する様に意図されている。だが実際に起るのは逆の事である。セックスと力についての二、三の全く意識的な概念を皮相的な、不注意に選んだイメージに慎重に変形した事である。
(筆者訳)

Leavis, F.R., *D. H. Lawrence : Novelist*. Harmondsworth, Middlesex, England : Pelican Books, 1973. p. 79

The evoking of the pagan renaissance strikes one as willed and mechanical; at any rate, it is monotonous and boring. The descriptions of rituals and costumes and dances and ceremonies fill immense areas of print; and there are pages upon pages of chants and hymns that one feels Lawrence must have written very easily, and so perhaps with pleasure—the reader tends to skip them. It is by a kind of incantation, a hypnotic effect figured in the endless pulsing of drums playing so large a part in Don Ramón's campaign, that Lawrence tries to generate conviction, and he produces boredom and a good deal of distaste.

異教の復活を呼び起すという事は意図的であり機械的であると思われる。とに角単調で退屈である。礼拝式、衣装、踊りそして儀式の叙述がこの本の大部分を占める。そしてロレンスが大変楽々と、それ故に恐らく楽しんで書いたに違いないと思われる様な聖歌や讚美歌が何頁も何頁も続く。——読者はそれをとばして読みがちになってしまう。一種の受肉、即ちドン・ラモンの宗教運動で大変大きな役割を果たす絶え間ない太鼓の響きの中に象徴される催眠的效果によってロレンスは説得しようとしている。だが、彼は人に退屈や大きな嫌悪感を与えているのだ。(筆者訳)

註13) *The Collected Letters of D. H. Lawrence*, vol. II, London : Heinemann, 1965. p. 845, a letter to Curtis Brown. 23 June 1925

註14) *Letters*. p. 1045, a letter to Witter Bynner, 13 march 1928

……the leader of men is a back number. After all, at the back of the hero is the militant ideal: and the militant ideal, or the ideal militant seems to me also a cold egg……the leader-cum-follower relationship is a bore. And the new relationship will be some sort of tenderness, sensitive, between men and men and men and women……

人の指導者というのは時代遅れのものとなってしまった。結局英雄の背後には戦闘的な理想がある。そして戦闘的理想又は理想的闘士というのも私には冷たい卵に見える。(中略) 部下を連れた指導者はうんざりさせるものだ。そして新しい関係は男と男の間又男と女の間にかける、感じやすい或る種のやさしさとなろう。

註15) *Letters*, p. 1033. a letter to Catherine Carswell, 10 January 1928

註16) *Letters*. p. 1038. 12 February 1928

註17) *The Portable D. H. Lawrence*, op. cit., p. 597. a letter to Curtis Brown, 15 March 1928

訳 : 伊藤整・永松定共訳「D. H. ロレンスの手紙」弥生書房。1959 pp. 221-222

註18) *D. H. Lawrence*, Edited by H. Coombes. Harmondsworth, Middlesex, England. Penguin Education, 1973. p. 186. に於ける a letter to Rolf Gardiner 17 March 1928

註19) 「D. H. ロレンスの手紙」前掲書 p. 223

註20) 羽矢謙一訳「愛と生の倫理」南雲堂 1971 p. 35

註21) *Phoenix. The Posthumous Papers of D. H. Lawrence*. Edited and with an introduction by Edward D. MacDonald. London : Heinemann, 1970. p. 280

註22) 「愛と生の倫理」前掲書 pp. 45~46

註23) *Lady Chatterley's Lover*. London : Heinemann, 1961 p. 41. *Apropos of Lady Chatterley's Lover*.

註24) 「愛と生の倫理」前掲書 p. 40

いかに眉目よき女でも、彼女の内部にある性の焰が燃え上って純粋に輝き出さないかぎり、愛らしい女となることはできない。輝き出した彼女の性の焰が顔にまでのぼって行って、それがこちらの内部なる性の焰と触れ合うときはじめて愛らしい女となるのだ。

註25) この作品の最後に於ける Mellors の手紙で、Clifford 事業の方も、段々悪くなっている事が暗示されている。

註26) よく知られている箇所を二つ、次に引用する。

All the while he spoke he exquisitely stroked the rounded tail, till it seemed as if a slippery sort of fire came from it into his hands. And his finger-tips touched the two secret openings to her body, time after time, with a soft little brush of fire.

'An' if tha shits an' if tha pisses, I'm glad. I don't want a woman as couldna shit nor piss.'

.....

'Tha'rt real, tha art! Tha'rt real, even a bit of a bitch. Here tha shits an' here tha pisses: an' I lay my hand on 'em both an' like thee for it. I like thee for it. Tha's got a proper, woman's arse, proud of itself. It's none ashamed of itself, this isna.' (Chap. XV)

話しているあいだずっと男はその丸いしりをやさしく撫でていたので、そこから男の手のなかへなにかすべすべした火みたいなものはいってくるような気がした。そして男の指さきは、やわらかな小さな火の刷毛のように、ときどき、女の体の秘密に触れるのだった。

「だからきみがうんこをしてもおしっこをしても、ぼくはうれしいよ。どちらもできんような女なんかほしくないや」

(中略)

「きみはほんとうの女だ、きみってひとは！ほんとうの女だ、どこか雌犬めいてさえいる。ここできみはうんこをしここのおしっこをする。ぼくはその両方に手をあててそのためきみが好きなんだ。それためきみが好きなんだ。きみはちゃんとした、女のしりをしてる、ご自慢のね。ちっとも恥ずかしがることなんかありはしないさ、絶対に」

With quiet fingers he threaded a few forget-me-not flowers in the fine brown fleece of the mound of Venus.

'There!' he said. 'There's forget-me-nots in the right place!'

She looked down at the milky odd little flowers among the brown maiden-hair at the lower tip of her body.

'Doesn't it look pretty!' she said.

'Pretty as life,' he replied.

And he stuck a pink campion-bud among the hair.

'There! That's me where you won't forget me! That's Moses in the bullrushes.' (Chap. XV)

やさしい手つきで勿忘草を2, 3本ヴィーナスの丘の美しい茶色の毛のなかに男はさした。

「ほら！ここが勿忘草を飾るにふさわしい場所だ」

下腹部の茶色の毛のあいだのその乳色をしたおかしな小さな花を女はのぞいて見た。

「まあきれいだこと！」

「生命のようにきれいだ」

それから男は淡紅色の石竹のつぼみを毛のあいだにさした。

「ほら！ これがきみの忘れてならない場所にいるほくだ！ これが葦間のモーゼ（『旧約聖書』「出エジプト記」第2章第3節一）なのだよ」
訳注

参 考 書 目 録

◦ D. H. Lawrence の著作

1. *The White Peacock*, The Phoenix Edition of D. H. Lawrence (以後 Phoe. と略称). London : Heinemann, 1969
(邦訳) 伊藤礼訳「白孔雀」中央公論社 1966
2. *The Trespasser*, Phoe., 1970
(邦訳) 西村考次訳「侵入者」八潮出版 1964
3. *Sons and Lovers*, Phoe., 1969
(邦訳) 伊藤整訳「息子と恋人」河出書房 1963
4. *The Rainbow*, Phoe., 1971
(邦訳) 中野好夫訳「虹」新潮社 1954
5. *Women in Love*, Phoe., 1969
(邦訳) 伊藤整訳「恋する女」河出書房 1970
6. *Aaron's Rod*, Phoe., 1967
(邦訳) 註5参照
7. *Kangaroo*, Phoe., 1970
8. *The Plumed Serpent*, Phoe., 1970
(邦訳) 西村考次訳「翼ある蛇」小山書店 1950
9. *Lady Chatterley's Lover*, Phoe., 1961
(邦訳) 西村考次訳「チャタリー卿夫人の恋人」八潮出版 1973
10. *The First Lady Chatterley*, Holland : Heinemann, 1960
11. *John Thomas and Lady Jane*, New York : The Viking Press, 1974
12. *The Collected Letters of D. H. Lawrence*, 2 vols., ed. by Harry T. Moore. London : Heinemann, 1965
13. *Phoenix*. 註21参照
14. *Phoenix II*. Collected and edited with an Introduction and Notes by Warren Roberts and Harry T. Moore. London : Heinemann, 1968
15. *Twilight in Italy*, Phoe., 1970
16. *Mornings in Mexico and Sea and Sardinia*, Phoe., 1971
17. *Etruscan Places*, Phoe., 1970

18. *Studies in Classic American Literature*, Phoe., 1964
19. *The Complete Short Stories*, Phoe., 3 vols., 1970
20. *The Short Novels of D. H. Lawrence*, Phoe., 2 vols., 1968
21. *Apocalypes*, Phoe., 1972
22. *Fantasia of the Unconscious and Psychoanalysis and the Unconscious*, Phoe., 1961
23. *Movements in European History*, Oxford : Oxford Univ. Press, 1971
- 参考文献
24. 中野好夫編「ロレンス研究」小山書店 1950
25. Lawrence, Frieda, *Not I, But the Wind*……Bath : Cedric Chivers, 1973
(邦訳) 二宮尊道訳「私でなくて風が……」弥生書房 1969
26. E. T., *D. H. Lawrence*. London : Fank Cass, 1965
(邦訳) 小西永倫訳「若き日のD. H. ロレンス」弥生書房 1977
27. Aldington, Richard, *Portrait of a Genius, But…… : The Life of D. H. Lawrence*. New York : Collier Books, 1967
28. Moore, Harry T., *The Life and Works of D. H. Lawrence*.
註4参照
29. Young, Kenneth, *D. H. Lawrence*. London : Longmans, 1952
30. Moore, Harry T., *The Priest of Love*. London : Heinemann, 1974
31. Nehls, Edward (ed), *D. H. Lawrence : A Composite Biography*. Madison : Univ. of Wisconsin Press, 1977
32. Slade, Tony, *D. H. Lawrence*. London : Evans, 1973
33. Leavis, F. R., *D. H. Lawrence : Novelist*. Harmondsworth, Middlesex : Pelican, 1973
34. Spilka, Mark, *The Love Ethic of D. H. Lawrence*. Bloomington : Indiana Univ. Press, 1955
(邦訳) 山口圭三郎「愛の倫理」篠崎書林 1971
35. Hough, Graham, *The Dark Sun*. (註3) 参照
36. Draper, R. P. (ed.), *D. H. Lawrence, The Critical Heritage*. London : Routledge & Kegan Paul, 1970
37. Forster, E. M., *Aspects of the Novel*. Harmondsworth, Middlesex : Pelican, 1968
38. H. Coombes (ed.), *D. H. Lawrence*. Harmondsworth, Middlesex : Pelican, 1973
39. 志賀勝「ロレンス」創元社 1939
40. 阿部知二(編)「ロレンス研究」英宝社 1970
41. 中橋一夫「ロレンス」研究社 1970
42. 村岡勇「D. H. ロレンス」研究社 1970
43. 西村考次「ロレンスの世界」中央公論社 1970
44. 野島秀勝「エグザイルの文学」南雲堂 1967
45. 西村考次(編)「ロレンス」研究社 1971
46. 入江隆則「見者ロレンス」講談社 1974

47. 柴田多賀治「ロレンス文学の世界」八潮出版社 1974
48. 小西永倫「D. H. ロレンス—詩人とチャタレイ裁判」右文書院 1975
49. 倉持三郎「D. H. ロレンス：小説の研究」荒竹出版 1976
50. 和田静雄「D. H. ロレンス文学の論理」南雲堂 1972
51. 福田恆存「西欧作家論」講談社 1966
52. 羽矢謙一「D. H. ロレンスの世界」評論社 1978
53. 鉄村春生「D. H. ロレンスの文学」あぼろん社 1976
54. 北沢滋久「D. H. ロレンス：その文学と人生」墨水書房 1973
55. 山川鴻三「思想の冒険」研究社 1974
56. 森晴秀「ロレンスの舞台」山口書店 1978
57. 倉持三郎（著訳）「D. H. ロレンス」英潮社 1974

（参考書目録及び参考文献は、前回の D. H. Lawrence：小説研究（I）に使用したものをも入れてある）